
イナズマフィアブリーチ～墮とされた太陽と死神とマフィア達～

天空 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イナズマファイアブリーチ／堕とされた太陽と死神とマフィア達／

【Nコード】

N1684U

【作者名】

天空 翼

【あらすじ】

お前が雷達の守護神を、太陽を地に堕とした女か…

俺は、いや俺達はお前を許さない…

今はせいぜい自分の嘘の中にある偽りの幸福に浸ってな…

俺達がそれを全部ぶっ壊して、全てを絶望に変えてやるからさ…！！

設定と注意事項

この小説はブリーチ、リボーン、イナズマイレブンのクロスです。
円堂が嫌われたり、死ぬのなんて嫌だ！という人はすぐに読むのを止めたほうがいいです。

後のGOには支障はありません。支障ないようにします。

それでは設定どうぞ！

登場人物

四季リオン

容姿・黒髪に藍色の瞳の美少年

年齢・14歳

所属・10番隊隊員、幻の十四番隊隊長

斬魄刀・風蘭 ふうらん

詳細・本作の主人公。西流魂街一地区潤林安出身で日番谷冬獅郎、雛森桃とは幼馴染。

護鄭十三隊の間で噂されている「幻の十四番隊」隊長。

事務業より斬魄刀を使用し虚を狩るほうが得意であるため、よく現世をフラフラしており現在は並森中学に通っている。

強い己の霊圧で靈感を持ったりボーンに正体を暴かれボンゴレに勧誘される。

しかし生きている人間はたとえ悪人であっても殺さないのが彼のモットーであり断る。

しかしリボーンに「ならば、俺達が殺してしまった人間をあの世に無事に送ってやってくれ」と言う頼みに首を縦に振りボンゴレに新たな守護者「風の守護者」として所属している。

任務で訪れた雷町で虚に襲われている円堂守の魂魄を助け、それが出会いとなる。

円堂の生前の事情を聞くとブチギレてツナをはじめとする守護者達とともに真つ黒オーラを出し円堂に限らずあのリボーンや雲雀、骸、日番谷、恋次を怯えさせる。

そして円堂の通っていた雷門中に通い円堂の無実を証明することを決意する。

雷門ではサッカー部員となりマネージャーとなっている悪女・ローラ＝ローズの嘘を暴いていく。

FW担当。

性格は元気いっぱい、好奇心旺盛だが一度キレるとむっちゃ腹黒くなり喋り方が俺から僕になり口調も丁寧なものになる。それがさらに恐い。

追加設定・死神皆に愛されている。

斬魄刀の解号は「清き風よ…吹きつけよ！風蘭！」

円堂守・偽名「四季雷斗」

容姿・原作通り、義骸の場合は髪形が普段とは変わり短いポニーテールになり寝癖のような尖った髪はなくなっている。茶髪なのはそのまま、瞳の色は翠

年齢・14歳

所属・10番隊隊員、幻の十四番隊副隊長

斬魄刀・守鈴しゅりん

詳細・本作のもう一人の主人公。元雷門中サッカー部キャプテン。

悪女によって貶められ拳句の果てにクラスメイト達から屋上から突き落とされてしまう。

魂魄だけになっていたところを強い己の霊圧で虚を誘き寄せてしまい虚に襲われるが任務で雷町に訪れていたリオンに助けられ、自身も魂魄のまま死神の力を引き出し死神になったことが出会いとなる。リオンに生前の事情を話し、ツナをはじめとする守護者達ともブチギれてに真つ黒オーラを出したリオンに怯える。

その後はリオンに尸魂門に連れて行かれ、特訓を受けた後、正式に死神になりリオンの勧めとリオンから元柳斎への脅しという名でゲフンゲフン！紹介によって護廷十三隊の間で噂されている「幻の十四番隊」副隊長になる。

リオンに義骸を渡された後、リオンが雷門に行くまでの間、並森中

学に通っている。

そして自身の通っていた雷門中にリオンの双子の弟として通い通い自分が無実だということを証明することを決意する。

雷門ではサッカー部員となりリオンとともに悪女・ローラ＝ローズの嘘を暴いていく。

GK、DF担当。

性格は原作そのままだが黒いリオンには逆らえない。

斬魄刀の解号は「響け、守りの鈴…！守鈴！」

姫川ローラ・本名「ローラ＝ローザ」

容姿・腰まで長い長髪 of 金髪（染めている）に桃色の瞳（カラコンです！）。顔は中 of 下 of 下だが化粧で隠している。しかしそれもやりすぎなため厚化粧となっている。

年齢・14歳

所属・ローザファミリー令嬢兼雷門サッカー部マネージャー

斬魄刀・血薔薇^{ちっばい}

詳細・典型的な悪女で円堂を貶めた張本人。

語尾を延ばした喋り方をするぶりっ子で自分が世界一可愛いと思っている頭に虫が湧いている可哀想な人。と、リオンに思われている。

実は昔、大罪を犯し尸魂界を追放された姫川家の令嬢兼死神で、一
家とともに尸魂界に復讐しようと策略している。

幻の十四番隊の恐ろしさを知らずに…

円堂が高い霊圧を持っていることに気づき自分達の飼っている虚の
パワーアップの餌にするため貶め、殺すように父親に言われ雷門に
転校して来た。が、円堂が可愛いと思ってしまい自分のものにした
くなる。

そして告白するのだが、断られたため貶め円堂を孤立させる。

そして計画通り円堂を殺し再び自分だけの物にしようと魂魄を探す
がすでに円堂は死神になり並森に連れて行かれていた。

転校して来たリオンを見て一目惚れ。

駒にしようと告白するが断られたため円堂のときと同じように貶め
ようとするが…

戦闘能力はほぼ斬魄刀に頼りつきりなので皆無に近い。

斬魄刀の解号は「血の契約によりい、咲き誇れえ！血薔薇！」解号
も語尾を延ばす。

幻の十四番隊

ずっと昔、虚がかなりの大群で襲い掛かる事件がおき、そのとき襲
ってきた虚を全て倒したのがリオンだった。

己をも上回るリオンの实力を見て隊長にしようと考えた元柳斎だっ
たが、リオンの「なら自分だけの部隊を作りたい」という脅sゲフ
ンゲフン！願いを聞き入れ新たに作られた部隊。

表舞台に出ることはほとんどなく隊員もリオンだけだった。
なので幻の十四番隊と語られている。

実際その幻の十四番隊があるのかは元柳斎、日番谷、雛森だけしか知らない。

味方

雷門イレブン

マネージャー

理事長

鬼瓦刑事

その他イナズマジャパンメンバー

死神代行とその仲間達

大空とその守護者達

リボン含むアルコバレーノ

ボンゴレ

キャバッローネ

敵

ローラ＝ローザ

ローザファミリー

円堂家

雷門中生徒& a m p・教員

敵対ファミリー

影山

設定と注意事項（後書き）

次回、円堂SIDEからです。

標的 1 物語はある悲劇から始まる（前書き）

今日は悲劇が起きる日。

太陽が1人の女によって地に堕ちる日。

そして…物語の始まりの日…

標的1 物語はある悲劇から始まる

何の前触れもなくその放送は流れた。

『みなさん！聞こえてますかー？』

そう、何の前触れもなく…

『聞こえてましたら、窓の外をござんくださーい！あ、屋上のほうね！』

とても楽しそうな声。しかしそれは…

『これから、屋上バンジージャンプ（命綱無し）が始まりまーす！』
酷い言葉だったから。

・雷門中学校屋上・

「止めて皆！円堂君！！」

「円堂！！」

「円堂！！」

雷門サッカー部のマネージャー、木乃秋。伝説のストライカー、豪炎寺修也。そして、今屋上から多数の生徒に抱えられ、安全柵の外

に出されているオレンジのバンダナの少年の幼馴染、風丸一郎太。

彼らは必死にオレンジのバンダナの少年、円堂守を抱えている生徒達に止めろと言う。

そう、彼ら以外の屋上にいる生徒達は皆、円堂を屋上から突き落とそうと…殺そうとしているのだ。

円堂の体はすでにボロボロで瞳は虚ろ。抵抗する力すら残っていない。

「やっと、この最低野郎がいなくなるぜ！」

「ああ！じゃあな！最低野郎！」

そのまま円堂を支えていた腕が離れる。

円堂は重力のままに前のりに倒れる。

最後に円堂が何かを言う。

「――」

につこりと最後の力を振り絞り笑う円堂の体はそのまま見えなくなった。

「「円堂おおおおおおおおお！……！！！！！！」」

2人の叫び声が屋上に響いた。

その日、1人の少年が死亡した。

そしてそれはすぐに少年とともにサッカーをした仲間の元に知らされた。

「何で、何で円堂さんが！！！」

円堂を慕っていた少年は泣きながらその知らせを聞いた。

「こんなの…ありえねえ！！！」

海を愛する少年はその知らせを聞き悲しみながら激怒する。

「…嘘だ。」

悪戯好きのやんちゃな少年は唇を噛み締め、悲しみが宿った目から涙を流す。

「円堂が、円堂が死んだ…？」

彼を気に入っていた少女は絶望した顔をし、膝をつく。

「嘘や、嘘や！嘘やと言ってやダーリン！！」

大阪で過ごす少女は愛している少年からのかつてのチームメイトの死を聞き必死に嘘だと言い聞かせる。

「キャプテンが…？ねえ、嘘でしょ？染岡君…」

雪国の少年はかつて自分を救ってくれた円堂の死を嘘だと思い込もうとする。

「円堂君が、死んだ？う、そだ…嘘だ嘘だ嘘だ嘘だああああああああ！！！！」

流星の少年はかつて自分にサッカーを教えてくれた少年の死を聞き泣き叫んだ。

「俺は認めない！マモルが、マモルが死んだなんて、認めないぞおおおお！！！！」

異国にいる友人である円堂の死を聞き絶望しながらもこれは夢だと思いつける。

誰もが円堂守の死を受け入れられなかった…

ある者はこの事実を受け入れなくても受け入れなければならず、またある者は激怒する。

またある者は全て嘘だと自分に言い聞かせ、またある者は夢だと思
い続ける。

それほどまでに彼の存在は大きかったのだ…

そして…

円堂守の葬儀が終わった後、全員が雷門サッカー部の部室に行った。

「何で、何で円堂さんが死ななきゃならなかったんですか！？ 答え
てください、豪炎寺さん！」

「…」

「風丸さん！」

「…」

「鬼道さん！」

「落ち着け立向居。」

部室に入ると真っ先に何故円堂が死んだのかと言っ疑問を投げかけ
てきた少年・立向居勇気を宥める少年・鬼道有人。

「落ち着けるわけじゃないか！！！！何であいつが、円堂が死ん

じゃうんだよ!？」

少女・財前塔子も叫んだ。

「マモル…」

急いでイタリアからやって来た少年、フィディオ・アルデナは先ほどからずっと俯き落ち込んだままである。

「皆、よく聞け。円堂は…この雷門全体から」

鬼道はそう言う少し躊躇いこつ言った。

「イジメを受けていた。」

ガッ!

その言葉が終わると同時に先ほどまで落ち込んでいた少年・フィディオは鬼道の胸倉をつかみ上げた。

「何故だ!何故、何故、何故、マモルはイジメられていたんだ!!」

「フィディオ!お前の気持ちはよくわかる。俺達も同じ気持ちだ!落ち着いて聞くんた。それと、くれぐれも話を聞いて元凶にオーデインソードを打とうとするな。円堂はな…」

それは物語の始まりの合図。

「円堂、どこに行くんだ？」

「あ、鬼道！豪炎寺！なんかさ、姫川に呼び出されてるんだよ。」

「そうか、邪魔して悪かったな。速いところ行って来い。」

「ああ！」

あの日円堂は数日前に雷門中に転校して来た姫川ローラに呼び出されていたらしい。

俺達はそのまま円堂とわかれた。しかし数分後…

「きゃああああああ！！！！誰か助けてええええええええ！！！！」

屋上から誰かの悲鳴が聞こえてきた。

全員が屋上に上がった。そして俺や豪炎寺も…

「円、堂…？何やってんだよてめえ…」

そこには円堂と姫川の2人がいた。

円堂は呆然と立ち尽くし、姫川は怯えた顔をし1人の生徒に泣きつ

いた。

よく見ると姫川の頬は腫れていた。

「ひつく、円堂君に告白されて…断ったらあ…」

「な！？円堂てめえ最低だな！」

「え？」

「振られたからって襲うなんて！」

「ち、ちがつ「うるせえよ！やっちまえ！！」ガッ！」

それを合図に円堂へのイジメは始まった。

「しかし、おかし過ぎるんだ。円堂は姫川に呼び出されていたと言った。しかし姫川は円堂に呼び出されたと言った。」

これはどういうことだと思う？と鬼道が言つと少年・綱海条助はポツリと呟いた。

「その姫川って奴に…嵌められた？」

「ああ。俺達もそうじゃないかと考えている。しかし、証拠がない。

」

これではお手上げなんだと言う鬼道を横目にフィディオは部屋から出て行こうとする。

「おい、フィディオどこに行く？」

「ああ、ちょっとオーディンソードを打ちたくなっただんだ。」

「フィディオ、オーディンソードを姫川に打ちに行くなよ？」

「違うよ。そのヒメカワに打ちに行くんじゃない。」

フィディオは部屋から出て行く。

そして来たのは河川敷だった。

「ここでマモルが練習してたんだね。」

フィディオはこっそり持ち出したサッカーボールを置いた。

「オーディン、ソード……！」

魔法陣が足元に現れるとフィディオはボールを思いっきり蹴る。

ボールは光の剣になりゴールに突き刺さった。

「……マモル、このシュートをもう1度止めてくれよ……FFIから何日かたったけど、俺はその間にオーディンソードをもっともってパワーアップさせてたんだ。」

フィディオは一人言う。もう戻ってくるはずのない友に向かって…

「パワーアップしたこの技を、ねえ、止めてよ！初めて止めてくれるのはマモルじゃなきゃ嫌なんだ！だから、戻ってきて、もう1度、この技を止めてくれよ！君の手で！！マモル、マモルうううううううう！！！！！！！！！！」

フィディオ、いや、円堂守の優しさ、熱さに触れた全ての少年は泣き叫んだ。

しかし、彼らは円堂に、雷門の太陽と驚くべき再会をすることをまだ…

知らない…

標的1 物語はある悲劇から始まる（後書き）

次回は並森にいる主人公、リオン君SIDEでいきます。

次回

「円堂守う？」

「てめえ何モンだ！」

「死ぬ気でお前を倒す…！」

「唯の死神さ。」

『死神と大空と天候達』

標的2 死神と大空と天候達（前書き）

平和な平和な並森町。

その穏やかな平和を壊すのだあれ？

アイツラダ！

標的2 死神と大空と天候達

・並森・

「行つてきまーす!!」

茶髪の少年が家から出てくる。

外には銀髪の少年と爽やかな少年、そして黒髪に藍色の瞳を持つ少年が待っていた。

「おはようございます、十代目!」

銀髪の少年・獄寺隼人は頭を下げた。

「ツナ、おはようなのな」

爽やかな少年・山本武も健やかに挨拶する。

「よ!はよっツナ!」

黒髪の少年・四季リオンも挨拶をした。

「おはよう皆!」

そしてツナと呼ばれた少年・沢田綱吉も挨拶をした。

「そついえば今朝のニュース観たのな?」

「え？今朝のニュース？」

並森中学への道を歩いていると、突然山本が話題を持ち出してきた。

「ああ、何でもあの雷門イレブンの円堂守が自殺したらしいのな。」

「ええ！？あの円堂守君が！？」

ツナは驚きＴＶでインタビューを受けていた円堂守の顔を思い出す。

「どう考えても、どう見ても自殺なんてするような人じゃなかったけど……」

そんな中、リオンは首を傾げツナと山本に聞いていた。

「円堂守う？雷門イレブン？なあ、それって誰？」

「「「は？」「」「」

リオンの言葉にその場に居た全員が固まった。

「え！？知らないのリオン！？」

「雷門イレブンって言えば、イナズマジャパンつう日本代表の少年サッカーチームで、つい最近ＦＦの世界大会、ＦＦＩで優勝したチームじゃねえか！」

「しかも円堂守と言えばそこで優勝したイナズマジャパンのキャプテン！知らない奴なんていないのな！」

「え？そうなの？」

リオンは若干、3人の気迫に押されて答える。

「でもさ、死んじやったんだよな？なら、無事に尸魂界ソウルソサエティに行けたらいいな…」

リオンはしみじみと呟く。尸魂界とは所謂あの世と言うところでリオンは実は人間ではなく尸魂界出身の現世を彷徨う魂を魂葬、虚という悪霊のようなものを退治する死神なのである。

「そうだね！」

「そうなのな！」

「そうですよね、十代目！」

全員がにっこりと笑う。しかしその時

キンコーンカーンコーン

チャイムの音が鳴り響いた。

「「「え？」「」」

これはつまり…

「「「遅刻だあああああ！……」」」

4人は走って学校へと向かった。あの恐怖の風紀委員長のトンファ

ーの餌食になりたくないと思死に願いなから…

「「「ギリギリセーフ！」「じゃないよ。「え？」「」」

全員が滑り込み安心したのもつかの間、静かな声が響き渡り彼らの希望をしっかりと木っ端微塵に砕いた。

そこにはあの…

「1分遅刻だよ。」

恐怖の恐怖の風紀委員長、雲雀恭也がトンファーを両腕に持ちに立っていた。

「噛み殺す…！！」

「ヒイイイ！！！！」

「雲雀、おはようなのな」

「てめえ！！！！」

「はよっ！雲雀！」

反応は様々であり（冷や汗ダラダラだが）雲雀との死の追いかけてこがしまろうとしていた。

そこに…

暗黒の翼を持つ吸血鬼のような人間が現れた。

「へ？」

「ワオ、君不法侵入だよ？噛み殺されたいの？」

「この人誰ー！？」

「てめえ何モンだ！」

「見かけない顔だなー、転校生なのなー？」

グルルル…グオオオオオオオオオオオ！！！！

吸血鬼人間はいきなりリオン達に飛び掛る。

リオン達はそれを間一髪で避けた。

「な、何だアレ！？」

「！皆、空を見るんだ！」

「」「空？」「」

全員が空を見ると空は赤くなっており赤い月が出ていた。

校舎からは人っ子一人居なくなっている。

「ど、どういことー！？」

「とにかく、これで思いつきり戦えるんだよ！」

リオンはそう言うつと儀魂丸と言う緑の玉を口に放り込む。

するとリオンの体から黒い着物姿で後ろに大剣を背負うリオンが現れた。

着物は右腕の裾が肩から切れており腰には青色の帯が巻いてある。着物の下の裾は切れ目が入っており、下には黒い長ズボンを履いている。

これがリオンの死覇装であり、後ろに背負っている大剣こそがリオンの斬魄刀、風蘭である。

「さあて、覚悟しろよ吸血鬼野郎！」

リオンは大剣を鞘から抜き構え言う。

解号の言葉を…

「清き風よ…吹きつけよ！風蘭！」

その瞬間、斬魄刀から抑えられていた霊圧が一気に開放され、周りには一瞬緑色の風が吹いた。

「ハア、やっぱりこうなるのかあ。」

ツナは儀魂丸と似たような玉を飲み込む。

するとツナの額からオレンジの焰が灯され手にした手袋はXグロブへと変化していた。

「…いくぞ。」

「まったく、風紀違反で噛み殺す…！」

雲雀はトンファアを構え戦闘態勢に入る。

「十代目、援護します！」

獄寺はボンゴレリングに死ぬ気の焰を灯しボックス兵器からフレイムアローを装着した。

「俺も！」

山本は時雨金時を引き抜いた。

「いくぜ！」

まずはリオンが風蘭で切りかかる。

が、それは簡単に避けられた。

「へえ、普通じゃダメってことかぁ。なら、これはどう！」

リオンは体制を低くし瞬歩で一気に距離を縮め風蘭を前に突き出した。

グウ！！

吸血鬼人間は腹部に刺さった風蘭を見て呻き声を上げた。

「お次はこれ！」

吸血鬼人間の腹部に刺さった風蘭から風が巻き起こる。

「吹き飛ばせ、大風！」

風はそのまま吸血鬼人間を前に突き飛ばした。

前にはツナがいる。

「ハア！」

ツナは死ぬ気の焰をグローブに纏わせ更に片方のグローブに焰を灯しそれを噴射させ吸血鬼人間との距離を一気に縮め拳を放った。

グハア！

吸血鬼人間は今度は校舎のほうに吹き飛ばされるが並森を愛す雲雀がそれを許すはずもない。

「噛み殺す…！」

雲雀はそう言うトンファーを使い吸血鬼人間の顎と腹を攻撃する。

腹はリオンが風蘭で刺したところを…

ギアアアアアアアアアア！！！！

更に吹き飛ばされたところを獄寺のフレイムアロー連射により空中に投げ出される。

「喰らいやがれ！！！」

グオオオオオオオオオオ！！！！

そして地面に激突しバウンドしたところを山本が

「時雨蒼燕流、篠突く雨！！！」

懷に飛び込み鋭い斬撃で突き上げる。

ギシャアアアアアアア！！！！

そしてしばらく身動きが取れなくなったところをツナがグローブを構える。

「死ぬ気でお前を倒す……！死ぬ気の零地点突破・初代エディション
！！！」

ツナが発射した焰は吸血鬼人間に当たると見る間に吸血鬼人間を凍らせた。

「リオン……！！」

「了解！切り刻め、風の刀！風刀烈火！！
ふうとうれっか

次の瞬間、風蘭に風が纏われる。

「切り込め!!!」

切り込めと言うと同時にリオンは風蘭を吸血鬼人間に向かって振り下ろす。

纏っていた風は全て、いくつもの刃の形となり吸血鬼人間を氷付けのまま切り刻んだ。

ギヤアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!!

吸血鬼人間は悲鳴とともに消えていった。

「あつけねえの。」

「そりゃあんな鬼のような怒涛の攻撃の嵐を浴びせられたらな。」

いつのまにかボルサリーノを被った赤ん坊、リボーンがいた。

「リボーン!」

「何時の間に!?!」

「ついさっきだ。しかしお前ら容赦ねえな。」

「いや、あんな怪物に容赦なんて必要ねえだろ?」

笑顔で言うリオン。

「笑顔で言わないでよ!?!」

いつの間にか超死ぬ気モードから元に戻っているツナがツッコミを入れる。

そこに今度は紫の髪、長髪の男が握手をしながら現れた。

「いやあ、さすがさすが。ボンゴレ十代目とその守護者ですねえ。」

「てめえ！さっきの化けモンはてめえの仕業か！！」

獄寺はダイナマイトを取り出し威嚇した。

「ギャンギャン吼えないでくれない駄目犬。」

「だ、駄目犬って……」

「しかし…君は誰だい？」

男はリオンを見て言う。

「データには君の事はなかったはずなのに…誰だい本当に？」

「唯の死神さ。」

リオンは不適に笑いそう言った。

「死神、ねえ。覚えとくよ。」

「あ、おい待ちやがれ！」

獄寺が止めようとするが男が出した煙玉で視界が眩んでいるうちに逃げられてしまった。

「また、戦いが始まるうとしてるのかな？」

「多分…な。」

少し重い空気が流れたがそんな空気を木っ端微塵に打ち砕いたのは携帯の着信音だった。

見えない夜空の星たちの光ゝ

「あ、俺の伝令神機だ。」

少し改造して普通の形態としても使えるようにしたんだよねと言い携帯を開く。

「これ、メールだな。ええっと…」

リオンはメールを読むとツナ達に用件を伝えた。

「糞爺からの命令で今すぐ尸魂界に戻れってさ。儀魂丸で授業受けさせるから。」

「任せるピョン！」

敬礼をするリオンの儀骸に入った儀魂丸。

「じゃあ、行つて来る!!」

リオンは地獄蝶に導かれ尸魂界へと向かった。

「ねえ、君達。」

見送った後、雲雀から恐怖の死ぬ気鬼ごっこのスタート合図が告げられる。

「もう授業始まつてるんだけど?」

「ハッ! わ、忘れてたああああ!!」

こうして残されたツナ達は雲雀との並中全域での鬼ごっこをするこ
とになったのである。

チャンチャン♪

しかし彼らは知らない。

これが現世と尸魂界をも騒がす事件の始まりに過ぎないことを…

標的2 死神と大空と天候達（後書き）

今回はリオンが雷町に行き円堂と出会います！

初の戦闘描写、どうでしたでしょうか？よければ感想でアドバイスください！

次回

「雷町で何やら怪しい霊生物が多数存在しているらしい。」

「ノープロブレム！」

「知るかああああああ！！！！」

「今助ける！！！」

『死神と任務と円堂守』

標的3 死神と任務と円堂守（前書き）

誰か助けて…！

誰か、誰か…神様…！！

叫び続けた少年は黒髪の死神と出会い救われる…

標的3 死神と任務と円堂守

「ここが雷町か…」

リオンは雷町に来ていた。というのも

・尸魂界・

リオンは糞爺こと山本元柳斎重國に会いに行っていた。

「ちわーっす！」

「わざわざすまないな。」

「いえいえ、で、何の用ですか糞爺。」

上司に向かい笑いながら糞爺と言う姿はまさに恐いもの知らずである。

「糞爺はないだろう。…まあよい。お前の担当している並森の隣町、雷町へ行つてほしい。」

またなんで隣町なんかと首を傾げるリオン。

「実は雷町一帯を担当している死神から雷町で何やら怪しい霊生物が多数存在しているらしい。との報告を受けたのじゃ。」

「ああ、なるほど…じゃあ、ちよっくら出かけてきますー！」

そして冒頭へ戻る。

「ん？この霊圧…」

虚だなと感じ取ったりオンはすぐさま虚の気配のする方角へ向かった。

オレンジのバンダナの少年・円堂守は走っていた。

自分を追いかけてくる謎の怪物達から逃げていた。

円堂が着ているのは死覇装。何故だか怪物に襲われたときに光に包まれ気が付いたら着ていた物だ。

腰には剣があるがあいにく円堂は剣を使ったことなど一度もない。チャンバラごっこすらろくにすることがないのだ。

そんな円堂に剣、斬魄刀をいきなり使えと言うのなど無理な話。

だからこそ円堂はただ逃げるしかなかったのだ。

途中、風丸等のかつての仲間達が見えたが、彼らに幽霊となった自分の姿など見えるわけないし、第一こんな化け物と会わせたくなどなかったので円堂は素通りした。

「くっそお、しつこいなあ……」

円堂は家の壁に背をもたれながら怪物・虚のことを見ていた。

「まるで俺の行く場所がわかってるみたいだ……」

円堂は自分が垂れ流しにしている力の知識は皆無なので虚が自分の霊圧をたどって追いかけてることなどは知らない。

「大風。」

声がするとその名の通り大きな風が起こる。

「うわああ!」

いきなり自分を追いかけてきた虚が吹き飛ばされた。

「今助ける! 切り裂け…風鎌!」
かぜかま

緑の鎌が虚をメッタ刺しにした。

「そこの人ー、大丈夫か? 怪我ねえか?」

空からいきなり自分と同じくらいの年の少年・リオンが降りてきた。

「え？と、飛んでる！？」

「よう。って、お前死神かよ…助けなくてもよかったか…」

「は？」

死神とはあの魂をサクッと刈ってあの世に持っていくと言う死神か？と円堂は思った。

「で、何番隊に所属してるんだ？」

「はい？」

「俺は十番隊所属だ。」

「え、ええつと…」

「…お前、死神じゃないのか？」

リオンにそう言われ焦る円堂。

「ハア、ただの魂魄かよ…じゃあ魂葬しなきゃな。」

「こ、こんそー？」

「あの世に送るく、失礼しましたー！！！」え、あ、おい待て！」

円堂はダッシュでその場を去る。

「待ちやがれ！」

リオンは瞬歩ですぐに回り込む。

「し、疾風ダッシュユ！？」

「疾風ダッシュユ？今は瞬歩だよ。さあて」

魂葬！と言うとリオンは斬魄刀の柄を円堂の額に押し付けた。

「え？」

しかし円堂の魂魄は魂葬されない。

「まさか…お前、死神になったのか？」

「は？」

リオンはとりあえず死神や虚のことを教えた。

「俺が…死神？」

「ああ。」

「あのさ！」

円堂はリオンに言う。

「俺でも、その…死神になれるのか！？」

「いや、もうなってるし…特訓してお前のその刀、斬魄刀っていうのの力を引き出せるなら俺の隊に入れてやる。」

「お前の隊に？」

「ああ。問題は無し！ノープロブレム！俺の隊、結構レベル高いから俺しかまだいないんだ。それに…俺の隊は現世での行動は虚を見つけたら倒すことと月1度送られてくる書類を片付ければ基本自由だから。お前をそんな姿にした現況も懲らしめられる。」

リオンは円堂の体を見やる。

円堂の体には打撲跡や切り傷などが大量にあった。

見ているだけで痛々しい。

「まずは並森にいる俺の友人の家に行くぞ。」

円堂の有無を聞かずにリオンは彼を抱えると瞬歩で並森のツナの家まで移動した。

「やつほー！ツナ！」

「り、リオン！？」

「ああ。って、とーしろーに恋兄…」

リオンは銀髪の子供、日谷番冬獅郎と赤髪の青年、阿散井恋次を見て言った。

「おお、相変わらず生意気な顔しやがって！でも久々だな！」

「阿散井…あまり俺の幼馴染に馴れ馴れしくするな。氷輪丸で凍らすぞ？」

「はいはい、わかったからストップストップ！」

「あれ？リオン、後ろの人って…」

「ああ、こいつは…まだ名前聞いてなかった。」

「」「おい！」「」

気が付くと笹川良平、ランボを除く守護者がツナの部屋の窓に張り付いてツナや冬獅郎、恋次とともにツツコミを入れていた。

骸はリオンが復讐者をボコボコにし脅sゲフンゲフン！頼み込みボンゴレの監視下に置くという条件で牢獄から出してもらっている。

「うわぁ！？」

「あ、駄目犬と腹黒爽やかとパイナッポーと戦闘狂！」

円堂はひどく驚きリオンは酷い呼び名を言う。

「さて、俺は四季リオン。お前は？」

「俺は円堂守！」

「ええ！？」

「どうしたんだツナ？」

「だって、円堂守って今朝話したF F Iの日本代表のキャプテンだよ！？」

「ああ。そうだったそうだった。で、お前がそんな姿になった理由をお聞かせ願おうか？」

リオンは自己紹介を終えると円堂に向き直り聞いた。

「あ、ああ… あれは、ちょうど3週間くらい前だったんだ。俺はF F Iのときに転校してきたらしい姫川ってやつに呼び出されていたんだ。呼び出された屋上に行くと姫川は俺に告白してきた。でも、俺友達の意味での好きだと思って… だから私の物になってって言われたとき、俺は誰のものでもないからって言ったんだ。そしたら…」

「告白されたんで断ったら殴られたとかお前のクラスメイトに言っただんたろう？」

「ああ。それでそれから… 豪炎寺や鬼道、風丸とか… サッカー部の皆は信じてくれたんだけどさ… 屋上から俺、突き落とされたんだ。」

「…ハア！？」

リオン達は絶句した。

「へえ… 無実の人殺したんだあ？」

「死ぬ気で御仕置きしてあげようかな？」

「はははっ、許せないのな」

「そいつ果たしてやりましょうか？」

かなり黒いオーラを出しているリオン達。

上からリオン、ツナ、山本、獄寺である。

「クツクツクク…」

「フフフフフツ…」

「ハハハハハッ…」

「クスクスクス…」

上からリオン、獄寺、山本、ツナの黒い笑い声だ。

彼らの笑みは普段の山本を思わせるようにそりやもう健やかで爽やかなものだったがそんな笑みを浮かべる彼らの後ろにはそりやもう地獄の閻魔大王や子供達の恐れる妖怪、口裂け女やてけてけすら泣きながら逃げ出しそうな、真っ黒オーラが漂っていた。

部屋の温度は暖かい気温のはずなのに軽く-20度を下回っているであろう寒さになった。

「……り、リオン「っあ、あ！？何か言ったか！？」お考え中に見ませんでした！」「……」

リオンはどうやって雷門の奴らとその悪女を《生き地獄という名の絶望のドン底の更にドン底に叩き落せるか》を考えていたところに日番谷や恋次、骸に名前を呼ばれたのでドス黒い殺気が大量にこもった声を上げた。

そして名前を呼んだ彼らは身の危険を感じて即座に綺麗に土下座して謝った。

「ちょっとママンの様子を見ろ」「お前も考えろよりボーン？」逃げていいか！？逃げていいか！？」

あのリボーンすらプライドを捨て去ってダッシュで逃げ出したくなるほど部屋の温度は下がっていたのだ。

「ねえ、君は記憶を読み取って映像にする鬼道が使えたはずだよね？」

「ああ。で？それが何だって言うんだ雲雀？」

リオンの笑みに思わずブルツと震えてしまう雲雀だが言葉を続けた。

「それでちょっとその悪女の顔を映し出してよ。その壁とかに。」

「いいよ 守、そいつの名前は？」

「ヒイ！ひ、姫川ローサ、だけ、ど…」

あの鈍感&宇宙一のサッカー馬鹿と称されるほどの円堂すら脅える。

「へえ…姫川ローサねえ。って…」

「「「姫川！？」「」」

一斉に声を上げるリオン、日番谷、恋次。

「お前ら何か知ってるのか？」

「ああ。結構昔に大罪を犯して尸魂門を追放させられた家の当主の死神が姫川だった。」

リボーンが聞くと日番谷が答えた。

「ちなみにその大罪というのは尸魂門を自分達の物にするために虚を使つてのテロだったんだっけ？対虚対戦って呼ばれてる。たしかどっかの死神がたった一人で全部その虚を倒しちゃったんだよね。で、その死神が自分だけの隊を作りたいといって作ったのが十四番隊。でも表舞台にはほとんど出ないから幻の十四番隊って呼ばれてるんだよね。」

「その死神がお前だろうが！！」

リオンが間延びした声で言うと言つて日番谷がツツコミを入れた。

「はあああああああ！！！？？」

恋次がそれを聞くと驚く。

「じゃ、じゃありオンが幻の十四番隊を作ったし、死神……？」

「うん。知らなかった？」

「知るかあああああ！！対虚対戦のとき活躍した十四番隊を作った死神って言えば総隊長をも上回る実力を持つ死神で伝説って呼ばれてる死神じゃねえか！！俺達死神の憧れだぞ！？」

恋次がまくし立てる。

「そんなすげえやつが…こんな、こんな…こんな奴なのかよおおおおおおお！！！！！！」

「こんな奴とは何だ、こんな奴とは？」

リオンが黒い笑みを再び浮かべて言う。

「すみませんでしたあああああああ！！！！」

恋次、本日二回目の土下座。

そしてリオンが壁に悪女…姫川ローサの顔を映し出した。

「…「…ゲロゲロゲロツ~~~~~！！！！」」

リボン&円堂以外の全員が一斉に窓付近へと走り吐いた。

「何だよこのうええ！ケバい化粧お化けは！？」

リオンは更に吐きながら言う。

「こんなのが隣町にいるなんて我慢ならないのな！！！！」

山本も黒属性を開花させて言った。

「うおおおええええええ！じゅ、十代目、ちよつとトイレに……」

獄寺は姉であるビアンキ以上に姫川が苦手なのかずっと吐きっぱなしだ。

「クフフ……今すぐ僕が六道輪廻を使ってそのメス豚を殺してきましようか？」

骸はニコニコと良い笑みを浮かべ言うが目が笑っていない。

「いやいや、だって今日から円堂守はボンゴレの……この俺、四季リオン率いる十四番隊の仲間だからね。仲間に手を出したってことはあの《自分が世界一可愛いと思ってる頭に虫が沸いている可哀想な人》は俺達に喧嘩を売ったということだ。売られた喧嘩は1億、いや、100億くらい倍返しにしたほうが礼儀正しいよ骸。」

リオンは更なる黒い笑みを浮かべて言う。

「リオン。君、今自分が無自覚笑顔でかなりえげつないことを言ったのをわかってる？」

雲雀が冷や汗をかきながら言う。

「しっかし…」

恋次は冷や汗をダラダラたらしながら言う。

「姫川ってやつは《絶対敵にまわしてはいけない人間達第一位》をオールコンプリートして敵に回しちまったらしいな…」

「みたいだな。」

日番谷が同意する。

「せめてその姫川って奴の精神が粉々に碎かれないことを祈りましよう…」

「ああ。」

日番谷と恋次は手を合わせ合唱して南無と唱えた。

「さて、守。」

「え？」

「お前にはこれから尸魂門に一緒に行き修行をしてもらう。十四番隊どころか死神になるんだ。せめて始解はできるようにしとけよ。」

「は？始解？」

「それじゃレッツラゴー！」

リオンは円堂を穿界門に引きずり込んだ。

「ちょ、ま、ぎゃああああ！！！」

多分リオンが円堂を引きずりながらダッシュしたのだろうと残った

彼らは考えるとツナが持ってきていたお茶を啜った。

標的3 死神と任務と円堂守（後書き）

次回

「汝は力を欲つするか？」

「へえ、結構太刀筋いいじゃん。」

「そろそろ実践行くか？」

「円…堂!？」

『斬魄刀と始解と再開』

標的 4 斬魄刀と始解と再開（前書き）

死神となった少年は己の刀と心を通わせる。

そして強さを手に入れふとしたことから友との再会を果たす…

標的 4 斬魄刀と始解と再開

リオンは円堂を戸魂門に連れて行き修行を開始した。

しかし円堂はまったく始解ができなかった。

「どうしたものか…」

リオンは十番隊の宿舎で唸っていた。

「やっぱり円堂に力が欲しいって思わせるのが一番だろうな」

リオンはよっし！と意気込むとそのまま眠りについた。

「円堂。今日の修行は俺に一発でも攻撃を当てられるかだ。」

「え？」

そんなことでいいのか？と円堂は思ってしまう。

「ああそうそう。そんなことか思ってる…」

リオンは風蘭を抜きいきなり切りつけた。

「うわわっ！」

間一髪で避けた円堂に不適に笑ってみせるリオン。

「痛い目見るぜ」

円堂は降りかかってきた刃先を斬魄刀で受け止める。

鞘に巻きついた赤いリボンに着いた鈴が音をたてた。

リオンが先に行動に出る。風蘭を振りかざし攻撃をしてくる。

円堂はそれを斬魄刀で受け止め、反撃に出る。

刀を横に振りかざしてきた。

「へえ、結構太刀筋いいじゃん。でも、俺には傷一つつけられないぜ！」

隙を見ては攻撃するがさすがは総隊長を上回るほどの実力の持ち主と言われるリオン。まったく攻撃があたらない。

時間がたつにつれ円堂は防戦一方となった。

「くっそ」

これでは自分が一撃を入れる前に体力切れでギブアップしてしまうと考えた円堂は瞬歩を使い間を詰めるがその攻撃すらリオンに受け止められてしまった。

（たえて加減されててもリオンはすごく強い。俺じゃ絶対勝てない！）

やはり一撃でも入れるためには始解しかないのだろうが現時点での円堂では始解はできない。

『汝は力を欲つするか？』

いきなり頭の中に声が響いたと思うと円堂は神社の社の前にいた。

「え！？」

「貴様が我の主か……」

チリリーンと音がすると社の前に首に鈴のついたリボンを着け、オレンジを強調した和服を着た少年がいた。

年は円堂よりかなり上であろう。

「今一度問おう。汝は力を欲つするか？」

「力……。そうだ、俺は少しでもリオンに追いつきたい……。いいや、追いつくんぞだ！！」

「ふっ、よかろう。我が名を呼べ、我が名は……」

またもや視界が一変すると円堂は元の場所に立っていた。

「え？」

「教えてもらったようだな。斬魄刀の名前を！」

「斬魄刀の名前？」

「そうだよ。斬魄刀は唯の刀じゃない。斬魄刀は死神によって形状

や能力が異なる。そしてそれは持ち主自身の魂を元として形作られているからで、いわゆる一心同体ってやつだ。それに、斬魄刀には本体ってのがあって意思がちゃんとある。お前、精神世界で会ったと思うぜ？」

円堂はあの少年がそうだったのかと納得する。

「さあ、言えよ。そして開放しろ！お前の斬魄刀の力を！」

円堂は柄を持つ両手に力を込める。

そして瞳を瞑り意識を集中させた。

「響け」

その言葉と同時にチリリーンと鈴の音が鳴り響く。

「守りの鈴…！守鈴！」

その瞬間、斬魄刀・守鈴から大量の霊圧が開放された。

「っ！やっぱり…」

リオンや糞爺もとい総隊長には及ばずとも隊長クラスの死神ならこの霊圧だけであてられてしまうだろう。

リオンは久しぶりに自分と渡り合えそうな強者が出てきたことにウキウキを感じていた。

（こいつなら…）

副隊長を任せてもいい。

リオンはそう判断し風蘭を鞘に収めた。

「え？」

「合格だ！」

「え？」

「この修行は始解を会得する為のものだ。お前は始解ができた。修行は終わり！」

「ええええええええええ！？」

「これから総隊長のところに行って正式な手続きをしてくる。お前も一緒に来い！」

円堂は戸惑いながらもリオンの後について行った。

「ガクガクブルブル」

円堂は総隊長のいる部屋から出たとたんに腰が抜け震えだした。

部屋に入ると優しいような声が聞こえたかと思うと刃物が飛んできた。

それを避けたりオンが人の良さそうな、でもかなり黒い笑みを浮かべ地獄のそこから響くような声で総隊長を脅した。

結果、円堂は十四番隊の副隊長に任命されたのである。

「これが腕章な。十四番隊の隊花、デルフィニウムが刺繍されてるだろ？」

デルフォニウム…花言葉は気まぐれ。まさに現世を放浪することが好きなりオンを隊長にした隊だということがよくわかる。

「これはお前が十四番隊副隊長つてことを表す代物だから無くすなよ。ただ普段は着けるな。」

「何でだ？」

円堂は首を傾げる。

「十四番隊はかなりの実力者が集まる強者揃いの隊だ。本当にあることが知れたらそれを利用するような奴が出てくるかもしれない。特に円堂は今日副隊長になったばかりで数日前に死神になったばかりだ。十四番隊があると知れ、円堂がその副隊長だと知れたらその十四番隊を悪用しようとするやつらに狙われる可能性がある。だから普段はその腕章は着けるな！そして十四番隊のことは他言無用だ！普段は十番隊隊員として過ごせ！OK？」

「わ、わかった。」

少しばかり難しく円堂は混乱したが、十四番隊が在ることがばれるとマズイというのだけはわかった。

「何や、おもしろいこと話しますな？」

のんきな声が聞こえたかと思うとそこには市丸ギン…尸魂界の裏切り者と称される死神がいた。

「ギン兄！何でここにいるのさ！？」

「久しぶりにかわええ弟分の顔を見にk」とにかく十番隊行くよ！
「て、袖引つ張らんといてや！！」

リオンはすぐさまギンと円堂を連れて十番隊執務室へと向かった。

「とーしろー！しばらく匿ってくれ！」

リオンは烈火のごとく飛び込むとギンをソファに座らせ浦原特性完全霊圧無装置をつけさせた。

「これでギン兄の霊圧は抑えた！気づかれることもない！」

「ブウー！！！」

リオンが連れてきたのが尸魂界の裏切り者の市丸ギンとわかったと日番谷は飲んでいたお茶を、十番隊副隊長、松本蘭菊は酒を噴出した。

「ケホケホッ！リオン、お前何で市丸ギンを連れてきた！？そいつは尸魂界の裏切り者だぞ！？」

「だーかーらー！何度も言ってるじゃん、ギン兄は藍染を殺そうとして藍染を騙してるって！！」

「しかしバれたらお前も反逆者として処刑されるぞ！？」

「いいじゃん、悪くない人間を悪くないと言って何が悪いんだ？どうせギン兄には藍染を殺した後できっちり罰を受けて俺の隊に迎えようと思ってるんだから！」

「お前そんなこと考えてたのか！？」

ギアアギアと騒ぐ日番谷とリオンを横目にギンは円堂と蘭菊と蘭菊の入れたお茶を飲み自分の持ってきた土産の和菓子を一緒にほのぼのと食していた。

「隊長、それぐらいにしておいてあげてくださいよ。リオンの言うことも正論ですし、なにより浦原特性霊圧無装置を着けてるんですから、斬魄刀開放して切りかかつてはこれませんし。ねえ。」

「とーしろー、お願い！」

パンツと手を合わせて頼み込むリオン。日番谷もそれを見て渋々言い合いを止め、素早く書類を終わらせティータイムに混じった。

「それにしてもこの子かわえなあ！新人さんなんか？」

「おう！こいつは円堂守。」

「そつえば最近如何なの？ちゃんと食べてるわよね？」

「食べとる食べとる。尸魂界で会つのは久しぶりやけどよく現世でのリオンの家にお邪魔して手料理食べさせてもるとるからな。」

「それでよく藍染に気づかれないな……」

日番谷は氷輪丸を使いギンを凍らせる準備をして言った。

「あかんであかで、幼馴染と仲よしとるからって嫉妬しちゃ。」

「それにしても何で市丸さんが尸魂界の裏切り者なんだ？」

「表向きはそうなんだよ。でも裏では幼馴染である蘭菊さんを小さいときに酷い目にあわせた藍染つてやつを殺す隙をうかがうために尸魂界を裏切った振りをしてるんだ。」

「へえ」

「つと、そっぴゃあ何やおもしろい話ししとったやないか。十四番隊とかゆう」

リオンは内心ギクツときた。

「ええつと…」

「僕の目は誤魔化せへんで」

仕方なくリオンは十四番隊のことを話した。

「ただの伝説かと思たらほんまに在ったんやな、幻の十四番隊。」

「そつ。てなわけでギン兄ご馳走様でした。円堂、そろそろ実戦行くか？」

「へ？お、おう！」

「ギン兄、装置取ったらすぐに尸魂界から出ること！大変なことになるからな！」

「わかつとるわかつとる。行つてら」

現世

「守、そつちに行つた！！」

都合よく虚が大量に現れたので2人は手分けして倒していつている。その途中一匹の虚が逃げたので円堂はそれを追いかける。

虚が向かう先にはピンクの髪の少年が…

「危ない！！」

聞こえるはずのない声を出す。

円堂は虚と少年の間に入り守鈴で虚の攻撃を受け止めた。

「くっ！！」

刀と虚の爪が擦れて火花が散る。

「円…堂!？」

円堂は聞き覚えのある声に振り向く。

そこには…

「つ、綱海!？」

沖縄にいるはずの少年・綱海条助が立っていた。

「綱海!逃げろ!ー!うわっ!ー!」

円堂が転んだ。その隙に虚が爪を振り上げる。

「はいそこまで〜」

軽そうな声が聞こえると虚の仮面から大剣が突き出していた。

そう、リオンが駆けつけたのだ。

「こんな雑魚に手こずるなんて…まだまだな守。」

ウインクしながら風蘭を抜くリオン。

「り、リオン…助かった〜」

息を吐きながらへたり込む円堂。

「ハハッ、こ、腰抜けたかも…」

綱海もへたり込む。

目の前で友がやられそうになったからだろつ。

「それにしても円堂、何で…お前死んだはずじゃなかったか？」

「え、ええつと…」

円堂は冷や汗を流している。

「守、下がつとけ。初めまして、俺は四季リオンと申します。失礼ですがあなたは？」

「俺は綱海条助だ！」

「じゃあ、綱海さん。」

「綱海で良いぜ！敬語も無しで！」

「じゃあ綱海。単刀直入に聞く。お前は守の…円堂の味方か？」

「ああ、俺はあの女の言い分が信じられねえ。」

「すでに事情は知ってるらしいな。ついて来てくれ。そこで話すよ。」

リオンは円堂を背負い歩き出した。

標的 4 斬魄刀と始解と再開（後書き）

次回

「こいつらが今回の事に協力してくれるやつらのリストだぞ。」

「あの女を除外するサッカー部の人達全員にこれを渡して着けてもらうように言ってお下さい。ただし俺達のことには明かさなくてください。」

「し、四季雷斗です！」

「並森中学だ。」

『動き始める死神と転校』

標的5 動き始める死神と転校（前書き）

海を愛す友人と再会した太陽の死神少年。

そして彼を保護した死神の少年もまた、彼の罪を暴かんと行動を開始する。

復讐の時は、すぐそこまで迫っていた…

標的5 動き始める死神と転校

着いたのは並森にあるツナの家。

「ねえ、いい加減この家を集合場所にするの止めてくれる？」

ツナに呆れられた声で言われるがリオンは笑ったままだった。

「で、綱海。今現在の雷門はどうなっているんだ？主にサッカー部とかあの女の周りとか…」

綱海はリオンの言葉を聞きツナの母親、奈々の入れたお茶を啜り疑問を投げかけた。

「何で俺が「雷門に通ってるかわかるかって？聞いたところお前は沖縄が故郷らしいじゃねえか。けど雷町にいた。しかも雷門の制服を着てね。」

見事な洞察力だった。

少なくとも雷門中学生よりかは…

「ああ、わかった。でもその後に何で円堂が生きてるか。お前らが何者なのか教えてくれよ。」

綱海は念押しすると話し始めた。

円堂の葬儀が終わった後、フィディオ・アルデナを初めとする極僅かだが世界で戦ったチームのキャプテンやイナズマキャラバンに乗

っていた人間が円堂の無実を暴こうと雷門に転校しあの女のいるサッカー部に入ったそうだ。

「皆…」

円堂は目を潤ませて涙をこらえ話を聞いている。

「けど…あの女！鬼道の家の力を使っても証拠が集められないんだ！…」

「鬼道？家の力？もしかして金持ちの家なのか？」

「ああ。で、円堂のいたクラスにフィディオとヒロト、ロココの3人が転校してきた。3人とも円堂を裏切ったクラスの人間に心の中では嫌悪していたようだったけど、とりあえず普通に振舞った。で、その後サッカー部に入部したんだ。でも次の日…」

綱海が苦虫を噛み潰したような顔をする。

「フィディオがあの女に呼び出されて…くっそ！…！」

綱海は叫んだ。

「せっかく証拠が掴めそうになっても相手が先手を取っちゃっ！！お陰でフィディオが…！！！」

円堂の顔が真っ青になる

自分の友があんな女に陥れられた。

このままではいつか彼も自分と同じような目に合うであろう。

円堂は急いでリオンに縋りついた。

「お願いだリオン！！俺の友達を…フィディオを助けてくれ！！！」

「わかってる…。リボーン！」

リオンは事の成り行きを見守っていたリボーンを呼び出す。

「綱海！これから俺達のことを話す！これは全てが真実だからな！」

そしてリオンはボンゴレ、裏社会、死神、尸魂界のことを話した。

「つまり、円堂は死神になってお前の作った隊に所属していると？」

「ああ。多分、死神化してる守の姿が見えるのは守の霊圧によってお前に霊感が備わったからだろうな。この分じゃ他のやつらも同じだろう。特に守は副隊長並の馬鹿でかい霊圧の持ち主…1、2ヶ月一緒にいれば大体の人間には霊感が備わるな。」

「こいつを見る。」

リオンはリボーンから渡された報告書を広げた。

「へえ…あの女の実家はローザファミリーっていうマフィアだ。しかもローザファミリーは人見売買に違法な人体実験、臓器の違法売買、麻薬の密売を行っている…これどー考えても復讐者の牢獄行きでしょ??？」

「ギリギリどころじゃないよ、完全にアウトじゃん。」

復讐者という単語に首を傾げる円堂と綱海。

「復讐者っていうのはマフィア達がもつとも恐れている組織だ。表の法では裁けないやつらを裁く人間。復讐者の牢獄に入れられたら最期、《二度と》日を拝むことはできねえ。」

「「に、二度と……」」

リボーンの説明にゴクリと喉を鳴らす二人。

「特に人見売買とか表の人間に危害を加えるようなことは裏社会の掟で禁じられている。それを犯したとなれば……」

「とーぜん、復讐者の牢獄行きだよね……」

「ああ。円堂、復讐を試してみたくはないか？」

「え……？」

復讐……円堂は復讐のふの字も考えたことはなかった。

「……俺は、自分の無実を証明できれば良いから……」

「わかった……。じゃあ、俺達で勝手に復讐する。」

「な！？」

「大丈夫」復讐って言うっても殺すわけじゃない。《社会的地位を地

の更に底まで叩き落してやる《ただだから！》

「経済制裁ってわけ？」

「おう！まあその後はフルボッコにするけど」

「へえ…どうせなら《雲雀さん達風紀委員も一緒》にどうか？」

「誘っておくよ！《草食動物達を一気に噛み殺せる》ってな」

かなりえげつないことを平気で口に行っているリオンとツナ。

この二人を見て円堂、リボーン、綱海がドン引きしたのは言うまでもないであろう。

部屋の温度はマイナスを軽くぶつちぎり悪寒が止まらない。

「って、おい！まさか一般人に風紀委員を寄こすつもりか！？」

風紀委員と言えばこの並森の秩序とも言える雲雀が率いる不良軍団。

そんな風紀委員が一般人と戦ったら…最後、一般人が見るに耐えない大怪我を負い、病院に搬送されてしまったらどうだろう。

しかも雲雀のトンファアの餌食になった人は特に！大怪我じゃ済まされないであろう…

むしろ瀕死の状態になる！

「なあ、リボーン。その悪女はもしかして今までの学校全てでイジ

メを受けてないか？」

「察しが良いな。そうだ。しかも全てが同じ理由だ。」

「これがイジメを受けたと訴えたやつらのリストだ。全ての人間が自殺で死んでいる。しかしどうやら調べたところ約4分の1は『自殺に見せかけた他殺』のようなんだ。」

「そうか…。」

「何人いるんだ？」

「ざっと80人。」

網海は自分の質問を返したりボーンの言葉を疑った。

そしてそれはリストを見ていたリオンを除く円堂、ツナも同じ。

「80…人？」

「こりゃ完全に裏社会の掟を破ったね。」

「そんなに…（真っ青）」

「今回協力してくれるのは？」

「こいつらが今回のことに協力してくれるやつらのリストだぞ。」

リボーンに渡されたリストを見るリオン。

「できるだけ集めたかったがやっぱり無理なやつらもいたぞ。」

「そっか…でもこれだけ集まったんだ！」

そのリストにはアルコバレーノやボンゴレ、キャバッローネなどの名前が書いてあった。

「後は…。円堂！」

「は、はい！」

「お前にはこれから俺がいつも入っている儀骸っていう人間とほぼ同じ体の作りをした作り物の体に入って並森中学に通え！俺が転校の手続きを終えるまでの間だ！」

「転校？」

「雷門だよ。そこでお前の無実を暴いてやる！相手はファミリーだから一般人である綱海達が証拠をつかむ前に先手を打つこともできる。でもボンゴレはあんな弱小ファミリーより遥かに格が上だ！だから先手を打たせることも無い！」

「じゃ、じゃあこれで！」

「守の無実は証明する！けど、もう少し泳がせておく。そのほうがあの手の奴は安心してボ口を出すことが多くなるからな。」

「でも、それじゃあフィディオが！」

円堂は姫川ローサを泳がせている間にフィディオが殺されてしまう

のではと心配になる。

「そこはちゃんと手を打っておくよ。リボーン！雲雀に頼んで雷門への転校の手続きを頼む！」

「わ、わかったぞ。」

「綱海、あの女を除外するサッカー部の人達全員にこれを渡して着けてもらうように言ってお下さい。ただし俺達のことは明かさないでください。」

リオンが敬語になる。これはつまりかなり怒っていると言うことだ。仲間を貶めた拳句他の人間を犠牲にしようとするあの女に。

「いいけど、これ何だ？」

綱海がリオンから手渡されたのはボタン。

「それ盗聴器と隠しカメラ内蔵ボタンです。それであの女の言動をバッチリ録れるから証拠が掴めます。」

「そうか！サンキューな！」

「それとあの女を含めた雷門中サッカー部に円堂守にそっくりな人物が最近並森中学に転校して来たって話を流しといてください。」

「わかった！」

リオンは真っ黒い笑みを浮かべると呟いた。

「醜き醜きお姫様、精々今は天国を見てると良いさ。その天国から俺がお前を地獄に引きずりこんでやる…！」

お腹が真っ黒黒すけな死神は動き出したのである。

並森中学

浦原から少し変わった容姿の儀骸に入った円堂は、全然似てない双子のリオンの弟として並森の綱達のクラスに転校したのである。

儀骸の容姿は少し長くなった後ろ髪をオレンジのゴムでポニーテールに結わいており寝癖のようなとがった髪は無くなっている。

「は、初めまして！し、四季雷斗です！」

こうして雷達の太陽であり守護神であった死神の少年はしばしの安息の日々を味わうこととなる。

雷門中

数日前、綱海はこっそりと姫川を除く全員にボタンを渡した

練習が終わった後、綱海は早速リオンに言われた円堂そっくりの人間が並森中学にいるという情報をさりげなく流し始めた。

「そつえばさあ。」

「如何した綱海。」

現雷門イレブンキャプテンとなった鬼道がいきなり話し始めた綱海に視線を向ける。

「いや、最近隣町の並森つてところ、その並森中学に円堂そっくりの人間が転校してきたって噂があるんだよ。」

「「マモルそっくりの人間!？」」

すぐに食いついてきたのはロココ・ウルパと…体中に怪我を負っているフィディオだった。

「あ、ああ。」

「お前達。」

そんな彼らに声をかけてきたのは響監督であった。

「練習試合の相手が決まったぞ。」

「次はどこの学校との試合ですか？」

「いや、正確に言えばFFにも参加したことのない無名のチームで練習試合というよりも特訓して欲しいと言っのに近いな。」

豪炎寺の言葉に響は答えた。

「で？その学校は……」

風丸が聞く。

「並森中学だ。」

標的5 動き始める死神と転校（後書き）

次回

「俺は…円堂って人じゃないよ。俺の名前は四季雷斗。」

「骸やとーしろーにも協力して欲しいんだ。」

「今日転校して来ました！四季リオンです！」

「ゴッドハンド…！」

『本当の始まりの時』

標的6 本当の始まりの時（前書き）

雷達は自分達の妄想でかつての守護神が生きていると信じている。

そして守護神にそっくりの少年に会いに行く。

それから数日たち、死神の少年は仲間を引き連れて醜き姫が愚かな騎士達の元へと出向いた。

復讐は始まった…

標的6 本当の始まりの時

「お待ちしておりました雷門イレブンの皆さん。」

並森中学に来た雷門イレブンを迎えたのはリーゼント頭に学ラン姿の風紀委員という腕章を着けた男だった。

「私、風紀委員の草壁と申します。」

「は、はあ……」

雷門イレブンマネージャー音無春奈はあらかじめ並森について調べていた。

ここ並森は一人の少年、雲雀恭也によって支配されている。

彼はまさに並森の秩序とも言われる存在だと。

そしてそんな彼の通う（というより根城）が並森中学なのだ。

しかしそんな雲雀を静止することができる存在がいる。

その少年は黒髪に藍色の瞳を持つ自分達とさほど年の変わらない少年で風の王と呼ばれており、扇子一つで雲雀と渡り合える強さを持つのだ。

彼は並森の情報を雲雀から戦うという取引の元、提供してもらっている。

そんな風の王もまた並森中学に通っているのだ。

彼なら円堂にそっくりの少年のことも知っている。そう考えた結果、姫川ローサを除いた雷門イレブンは密かに風の王を探すことにしたのである。

その理由は彼が生きていればいいという思いだけだった。

たとえ死んだことがわかっていてもだ…

「こちらがグラウンドです。」

「ありがとうございます。あの」

鬼道はグラウンドへと案内してくれた草壁に風の王について聞き始めた。

「風の王…。たしかに恭さんは、委員長はあの人と知り合いであり好敵手でもあります。私も知っています。ですが…教えることはできません。」

「何故ですか!？」

秋が問い詰める

「風の王から、太陽の王のために秘密にしておいてくれと直々に頼まれたのです。」

「…太陽の…王?」「…」

雷門イレブン全員が首を傾げる。

綱海以外は…

「はい。私達はそう呼んでいます。自分の事が知れたら太陽の王に危険が迫る可能性が高い。だから秘密にしておいてくれと。この言葉はすでに並森全体に広まっていますから、並森から情報を得るのは不可能でしょう。」

「そう、でヤンスか…」

雷門イレブンの一人・栗松が頂垂れる。

しかし風丸…。

彼は見た。たしかに、自分達の信じていた太陽であり守護神であり幼馴染であつた彼の…

並森の制服に身を包んだ円堂守の姿を…

「円堂！……！」

必死で走って追いついた彼は円堂に呼びかける。

円堂守と呼ばれた少年は振り向いた。

バンダナも着けていない、瞳が翠、寝癖のような髪がない、少し髪が伸びておりそれを結わいている。

違う点がかなりあったがそれでも彼は確信した。

彼は自分達の太陽であり守護神である円堂守だと…

しかし返ってきたのはとてつもなく残酷な返事で…

「誰？」

だった…。

「お前、忘れちゃったのか！？俺だよ、風丸だよ！一緒にサッカーをした！」

「残念だけど…」

翠の瞳からは光がまったく無く冷たい視線が放たれるだけ…

「俺は…円堂守って人じゃないよ。俺の名前は四季雷斗。」

「四季…雷斗？」

「そう。四季雷斗。その制服、並森じゃないよね？何処の生徒？」

「ら、雷門中…」

風丸は頭を鈍器で殴りつけられたような感覚を受けながらも震えた声で何とか答えた。

「雷門…。俺も今度そこに転校するんだ。その時はよろしくな。風丸さん。」

落ち着いた丁寧な口調で話す少年は自分の知っている幼馴染とはまったく違う人間だと言ったことをあらわしていた。

「っ…！そろそろ雲雀さんが巡回でここに来る時間帯だ！群れてたら君も俺も仕込みトンファアの餌食になっちゃう！速く逃げたほうがいいよ！」

「あ、ああ。」

風丸は言われたとおりにその場から離れた。

君、風丸さん、四季雷斗。

この単語が頭の中をグルグルと駆け巡った。

間違いなくあれは円堂守だ。

風丸はそう確信していた。

それは…そう確信させる決定的なものがあつたからだ。

自分は守などとは一度も口に出していない。なのに彼は円堂守ではないと言った。

円堂守を知っているなら別だが…何故だか彼はそれが頭に浮かび上がらなかった。

（幼馴染だからわかる。けど…）

何故、偽名を使った？何故、知らない振りをする？何故、他人行儀なんだ？何故、何故、何故…

考え考えているうちにグラウンドへと戻っていた。

「あ、一郎太くん。何処行つてたの？」

ブリッコ調で話しかけてくるマネージャー。

この女こそが幼馴染を奈落の底へと突き落とした張本人なのに！自分達の太陽であり守護神だった彼を地に落とした人間であるのに！怨むべき対象なのに！

風丸は証拠をつかむためにあえて拒絶せず、唯それなりに距離を置いて彼女と接していた。

「いいや、別に。」

「そうなのぉ。頑張つてねえ〜」

どうしても尻尾を掴めない！！どうすれば、どうすれば幼馴染の無実を証明できる！太陽の、守護神の無実を！！

そんな彼らを木の陰から見ている少年がいた。

そう、並森の風の王と呼ばれ、太陽の守護神を保護した少年、四季リオンである。

「…あれが、全ての根源か…」

リオンは空に向かって呪詛のような言葉を吐いた。

「醜き嘘つき姫。お前の目論見と偽りはもうすぐ音を立てて崩れる。雷達是谁もお前を信じない。信じているのは愚かな騎士達のみだ。アサリと死神と風の王を敵に回して、唯で済むとは思わないことだな…。風の王として、大空を守護する者として、そして…死神達の英雄としてこの言葉を送ってやろう……」

貴様に待つのは尽きることを知らない絶望のみだ。

そんなリオンは木の影からこっそりと雷門イレブンのことを見ていた。

「…それにしてもあの女、マネージャー業は他のやつらに押し付けて自分は応援してるだけかよ…」

リオンはずっと仕事をせずに頑張ってーVVと応援している姫川口ーサを呆れた顔で見っていた。

「化粧厚すぎ、香水つけ過ぎ。こっちまで悪臭が漂ってくるよ…」

「クフフフ、あの女。六道輪廻を巡らせてやりたいですね…」

突如現れた霧の中から出てきたのは六道骸を中心とする黒曜組（命名者・円堂）だった。

「ん？うわ、骸にクローム！？それに千種や犬まで！？どうしたんだよいったい…」

「骸様が、ローザファミリーに聞き覚えがあるっていうから調べていたの…」

「調べた結果、あの女の実家は昔エストラネオファミリーに資金を送っていた。」

「しかも、憑依弾をいくつか持ち去っていたピョン！」

憑依弾…かつて骸も使っていたマフィア界では禁断とされる特殊弾だ。

「憑依弾…こりやまた厄介な…」

「リオン！」

今度現れたのは日番谷と死神代行・黒崎一護、朽木ルキアだった。

「あれ？皆どうしたのさ？」

「姫川のことについて調べた結果を報告してやろうと思ってな。」

「俺達はこの前、旅行に行ったとき土産に買ってきた桜餅を届けに来たんだ。で、偶然バツタリそこで会ったんだ。」

「へえ」。あ、桜餅わざわざありがとう！一兄、ルキ姉！」

「話は聞いたぞリオン。何かあったら私達も力を貸そう。」

「おう！守にも食わせてやろうつと！」

リオンはルキアの言葉に返事をしながら桜餅を一つ頬張った。

「それでリオン。話しなんだが、やはりあいつは追放された姫川家の人間だ。」

「ええ」。憑依弾の次は追放された家でしたーって……。」

「一筋縄じゃいきそうに無いピョンー！」

「そうだな。ある程度の作戦を立てておかないと。」

リオンの言葉に犬、千種が言う。

「……骸やとーしろーにも協力して欲しいんだ。」

「はい？」

「骸には幻術を使って姿を消してあの女の悪事をビデオに録って欲しい。」

「クフフ……そのようなことでしたらお安い御用ですよ。」

「とーしろーには俺や守と一緒に雷門へ潜入して欲しい。チビだから中学生にもなり済ませるだろう。」

「誰がドチビだゴラァ!!」

「ドチビまでとは言っていないんだけど…」

リオンは苦笑いする。

「で、どうやって姫川の悪事を録るのだ？」

「それはもう俺があの子にわざと陥れら」「断固ダメ！絶対ダメ！」「うええー…」

リオンが自信満々にルキアの質問に答えようとすると日番谷とそしていつの間に来ていたのか円堂に反対された。

しかしリオンはめげずに見事二人を言いくるめたのだった。

「じゃあ、俺はこれで失礼するぞ。」

「私達もおいとまするか。行くぞ一護！」

「ああ！じゃ、今度また皆で遊びに行こうな！」

「うん！皆気をつけてー！」

元気よく手を振るリオンはすぐに円堂に向き直って聞いた。

「そつだ。調子はどうだ円堂？」

ここで何故、円堂が風丸に対してクールな態度が取れたのかという
種明かしをしておこう。

円堂は風丸に話しかけられる直前に死ぬ気丸によく似た飴玉を食べ
たのだ。

これは死ぬ気丸が小言弾のように静かなる闘志を引き出すのと同じ
で円堂が食べた飴玉の場合は静かな性格を引き出すのだ。

ちなみにこれは浦原とボンゴレが力をあわせて開発したものである。

性格を引き出すと言う代物なので体調に些か影響があるかもしれない。
と浦原に言われていたのでリオンは円堂に調子はどうかと尋ね
たのだ。

「問題ないよ！」

「そつか！それよりも…」

リオンはグラウンドの方へと目を向ける。

「…俺が抜けた後でも鬼道がしっかりキャプテンしてくれてる。ゴ
ールだって立向居やロココが守ってくれてる。なあんだ、俺が抜け
ても皆大丈夫じゃん…」

「守…。泣いてるのか？」

「へ？」

気づくと円堂の頬には一筋の水が流れていた。

「あ、あれ？何で、何で泣いてるんだろっ…？おっかしいな…あ、れ？」

「…大丈夫。お前もきつとあそこに戻る。」

「でも俺死んじゃってるんだよ？」

「大丈夫！俺を信じろ！」

リオンがニカツと歯を見せて笑う。

「…ああ！」

それに円堂もあの太陽のような笑みで返した。

それから数日後…

「今日転校して来ました！四季リオンです！あ、あんま話しかけんな（黒笑）」

「四季雷斗。同じくあまり話しかけるな。」

「日番谷冬獅郎。同じく話しかけんな。後、名前を呼ぶな。リオンに手を出したりチビとか言ったら日の目を二度と拝めないと思え。」

雷門に転校してきた3人はそっけなさすぎる自己紹介をすると席に着いた。

特にリオンは美少年なので女子から注目を浴びていたがなにせ真つ黒な自己紹介だったためにすぐに教室が静まり返ってしまった。

円堂もとい雷斗と言えばクラスの人間達は最初、自分達が殺した人間そっくり（本人です）だったため静まり返った教室が再びざわめきだしたがそれも日番谷の自己紹介で再び静まり返った。

こうして雷門登校初日から彼らはある意味注目されたのであった。

HRが終わるとリオン達の机に人だかりができていた。

「リオン君は何処から来たの？」

「雷斗君とリオン君って同じ苗字だね？まさか兄弟とか！？」

「日番谷君の銀髪って地毛なの？」

等々、彼らにとっては非常に迷惑極まりなくうざったい質問ばかりだった。

「皆あゝ、リオン君達があ困ってるよお？」

そんな人だかりを分けて入ってきたのはあの姫川ローサだった。

姫川をリオンは真つ黒な笑みで見やったり、雷斗は冷やややかな視線を送ったり、日番谷は窓を開けて喚起をし始めたりと様々な反応を示した。

「初めましてえ、私い、姫川ローサって言いますう。よかつたらあお友達になってくれるう？キャッ！言っちゃったV V」

リオン達は馬鹿馬鹿しいと言う視線を送るとフィディオに目をやった。

「あいつ、ボロボロになってるけどどうしたんだ？」

リオンがわかりきった質問をすることに雷斗は疑問を感じた。

しかし対象に幼馴染の日番谷はリオンが愚かな騎士達の反応を見るためにやっているのだと気づいていた。

「そいつはローサちゃんを苛めた最低野郎なんだ！！」

「そつよ！」

生徒達が口々にフィディオの悪口を言っていく。

「そつなのおゝ、私い、フィディオ君に呼び出されてえ告白されてえ、断つたらあ、ヒック！私すつごく恐かったあゝ（噓泣）」

もちろん嘔泣きである。

が、目に偽りの涙を浮かべた姫川に同情した愚か者達の悪口はどんどんヒートアップして行き…

「そんなやつ死んじゃえば良いのに！」

「っ！！」

ついにフィディオが目に涙を浮かべ同じクラスの豪炎寺、鬼道、秋、ロココ、ヒロトが反論しようとしたときだった。

「へえ、あの子がねえ…。でもすっごく強いんだね姫川ってさ！」

リオンが行動に出た。

「だって普通は女は男に襲われると男性恐怖症で無意識にでも男を拒絶する。話しかけるなんて言語道断！でも姫川は俺達に話しかけてるし他の男子にくつつけるなんて、すっごく立ち直りが早いんだねえ」（邪笑）

「「「え？」「」「」

フィディオを庇おうとしていた者達は全員目を丸くする。フィディオ自身もだ。

そして確信した。この人は味方だと。

「え、ええっと、それはあゝ…」

そして当の本人、姫川は冷や汗ダラダラ。

「しかも皆は実際に現場を見てないんじゃないの？」

「え？た、たしかに……」

「現場を見てないのにその奴がやったって断言できるなんてすげえな〜俺じゃ到底まねできねえわ〜（超腹黒笑）」

結局、チャイムが鳴りこのまま話しはお流れとなってしまうたが生徒達の心にリオンの言葉が重く残ったのは言うまでもない。

「で、凄かったのよ！あつという間にクラスの皆を言い包めて私達ちよつとスカツとしちゃった！」

ここはサッカー部部室。

姫川はまだ来てない。

そこで秋がスッキリとした顔で転校生の一人、リオンのことを話していた。

「もしかしたら、そいつがいれば円堂の無実も証明できるかもしれない。」

「その前に、姫川の悪事の証拠を集めなくてはならない。しかし、あいつは俺達が監視カメラのついたボタンをつけ始めてからまったく動きを見せない。」

「何もしなくてもフィディオはクラスの人間の勝手な妄想で暴行

を受け続けている。」

鬼道、豪炎寺、風丸がつぶやく。

「これじゃあ、埒が明かないなあ。」

サッカー部員の一人・マックスが言う。

「…くらい顔をしてちゃダメよ。今日、入部希望者が来る日よ？」
人ね。」

「入部希望者？」

半田が顔を上げる。

「来たようね。」

夏見が顔を上げ開いた扉のほうを見るとそこには…

「…入部希望の四季雷斗。」

「「「え!？」」「」」

今日、転校してきた雷斗がいた。

全員が顔を上げ驚く。彼が円堂にそっくり（本人）だったからだ。

「きゃ、キャプテン？」

「誰それ。俺は雷斗。円堂守じゃない。」

鬼道、豪炎寺、フィディオは疑問を感じる。

誰と言ったのに何故円堂守と口にしたのか…

実はこれ、円堂なりのメッセージなのだ。

自分はここにいるという…。

「ら、雷斗か…。ポジションは？」

「GKとDF。」

彼らはまたもや驚く。そのポジションはかつての円堂と同じだったのだから。

「なら、実力はどの程度あるんだ？」

「結構いけると思うよ。少なくとも、ファイヤートルネードくらいなら簡単に受け止めれる。」

雷斗は染岡の言葉に澄ました態度で答える。

「んな！？なら、証明してもらおうじゃねえか！」

染岡のその一言で彼らはまたもや衝撃を味わうこととなる。

グラウンド

「修也くうゝん！頑張つてえゝゝ」

ちょうど姫川も来て応援を始めるが、それを豪炎寺はウザったく見てゴールに目を向けた。

雷斗はユニフォームを着てゴールに立っている。

豪炎寺や他のメンバーはその姿を一瞬、円堂と重ねて見てしまっていた。

「いくぞ！」

「……」

黙ったまま構える雷斗。

「フアイヤートルネード……！」

豪炎寺が空中で体を捻りボールを思いっきり蹴る。

炎を纏ったボールはゴールへと突き刺さっていく。

その瞬間だった……

雷斗がある必殺技の構えを取る。

それを見たメンバーは目を疑った。

「あの体制…」

「まさか!…」

「ゴッドハンド!…」

オレンジ色の巨大な手のひらが浮かび上がり豪炎寺のファイヤートルネードを受け止める。

手が消え去るとそこにはボールをしっかりと片手で持った雷斗がいた。

「嘘…だらう?…」

「ゴッドハンド…」

豪炎寺が目を見開き呟くとロココがその技の名前を呟く。

「さっきのは…間違いなくキャプテンのゴッドハンドですよ?…」

春奈は全員に同意を求める。

全員が一斉にうなずいた。

「おーい!雷斗お!遅れてゴメンな!…」

全員が雷斗に詰め寄ろうとすると同時にリオンと日番谷が走って来た。

「リオン…」

「ん？お前ら俺の弟に何か用？」

「「「弟！？」「」」

「うん。俺と雷斗は双子なんだ。ぜんっぜん似てないだろ？」

「性格が違うあまり時々、どっちが兄か弟かわからなくなるんだよな。」

「とーしろーひでえ！しばらく口利かない！」

「すみませんでした！」

「お前らいい加減にしろ。」

「スマン…」

「あゝあ！？」

「全力ですいません！！！」

日番谷の言葉にリオンが口を利かないと言い日番谷が謝り、いい加減にしろという雷斗に謝る日番谷とドスの効いた声を出すリオン。そんなりオンに謝る雷斗。

雷門イレブンは彼らの力関係がリオン↓雷斗↓日番谷という順で並んでいるとわかった。

「（つまりこの3人の中でリオンと呼ばれた人間が一番強いというわけか…じゃない！）り、リオンと言ったな。」

鬼道は気を取り直してリオンに聞く。

「うん！」

「お前のポジsy「FWです！」そ、そうか…」

兄弟なのに性格がまったく違うことに少し戸惑いを感じた鬼道はそれでも気を取り直して次は日番谷のポジションを聞こうとする。

「言つとくが俺はマネージャー希望だ。」

「そうなのか？」

「ああ。（あの女の行動を探るためにな…）」

日番谷は姫川の行動、言動を探るためにマネージャーを希望する。

そんな彼の意図を知らない、知るはずもない鬼道は雷斗に疑惑の眼差しを向ける。

（何故あいつは円堂の技を使った？あのゴッドハンドは円堂のものだった…。円堂は俺達の妄想通り生きていた？いいや、ちゃんと火葬されたのはご両親が見ている。ならいったい…あいつは何者なんだ？）

その疑問は雷門イレブンの誰もが思っていた。

綱海以外は…

（頼んだぜ。 姫川がボタンを付け替えてから何もしてこなくなった今、お前らが頼みの綱だ！）

綱海は天に祈る気持ちで心の中でリオン達に願った。

そして姫川と言えば…

（フフフツ、リオン君はきっと私の美貌に引かれてサッカー部に入ったのねえ…。 いいわ、すぐにでも私の駒にしてあ・げ・る♪）

醜き姫は再び動き始めようとしていた。

それが自分を絶望の淵に追いやってしまうことも知らずに、自分が牙を向けられたのが誰なのかを知らずに…

標的6 本当の始まりの時（後書き）

次回

「そうやって円堂守も陥れたのか…」

「目にももの見せてやる!!」

「何なんだあの化け物は!？」

「円堂さん!？」

「正解…!!」

『闇の陰謀と大虚と風の本気』

標的7 闇の陰謀と大虚と風の本気（前書き）

醜き姫は死神の少年に手を下したことで自らの居場所と共に破滅の道を歩み始めることとなる…

それを見た死神の少年は醜き姫を笑い、更なる布石を打つ。

しかしそれと同時に雷達は闇の陰謀に飲み込まれかけてしまうのであった…

標的7 闇の陰謀と大虚と風の本気

ガサリ…

リオンが机に手を入れると何やら紙らしき物が入っていた。

（ついに来たか…）

リオンは回りに気づかれないように内心、ニヤリと笑みを浮かべる。

『リオン君へ

今日の昼休みに屋上で待ってますv

姫川ローサ』

「勝手に名前呼ぶなって…でもまあ」

少しからかってやろうか…

リオンはその言葉を飲み込んで口元に笑みを浮かべた。

その日、リオンは手紙を無視した。

リオンは姫川の手紙に気づかない振りをしたのである。リオンが手紙を読んだのは姫川がいないとき…。机の中の手紙に気づかない振りをすれば無視することも可能なのだ。

教室に入ると…

「リオンくうくん、どうして私との約束を破ったのお〜（ウルウル）」

「え？約束？（約束してねえし、気安く名前を呼ぶな！この化粧お化け！）」

リオンは表面上はずっとボケてるが心の中では偽者の涙を眼に溜めている姫川に悪態をついていた。

「覚えてないのお〜？酷いよお〜（嘔泣）」

「覚えてないも何も、したっけ？」

「したよお〜手紙見てなかったのお〜？」

「（それって完璧に一方的じゃねえか！この糞女！）どこにあるのその手紙？」

「机の中だよお〜」

リオンは机の中を見てわざと（しかしかなり上手い演技で）声を上げた。

「あ！本当だ。屋上で待ってますか…。ゴメンな気づかなくて。」

「いいよお〜（これで今日は忘れないわね！）」

しかし姫川はとんでもないことに気づかないでいた。

「でもゴメンな、今日は用事があって行けないんだ…」

「え？（何なの！？私の誘いは他のことを押しのけてでも守るものでしょうが！）じゃ、じゃあ明日はあゝ？」

「俺、これからずうずうずうずうと予定があるんだ。」

「で、でもあゝ、話し事態はたいしたことないのよあゝ。ちょっとだけいいからあゝ」

リオンはそれを聞くとニツコリといい笑顔を（むっちゃん黒い笑顔）を浮かべてこう言った。

「じゃあ、ここで話してよ。」

「え？」

「たいしたことないんでしょ？ならここで話して。それともここで話せない変な話なの？」

「ち、違うよあゝ」

「ならここで話して。今すぐに！この場で！」

姫川はかなり困った。

リオンを屋上に呼びつけ告白して駒にし断るようなら円堂やフィデイオと同じように陥れようと思っていた彼女。

もし今ここで告白してリオンが断ってもここは教室。

陥れることなど到底不可能だ。

「話せないんだ？じゃあ、授業がそろそろ始まるからこれで。」

(そ、そんなあ)

こうして姫川の目論見は《初っ端からへし折られた》のであった。

屋上

リオン、雷斗、日番谷はリオンオリジナル鬼道を使って音が漏れないように結界を張る。

屋上にはリボン、骸達・黒曜組もいる。

そして結界を張るとリオンはもう堪えられないと言うように盛大に噴出した。

[illegible]

「マフィアは女に優しくするもんだぞ？」

「『あんなの女じゃねえ（ありません）！歩く汚染廃棄物だ（です）！』『』」

リオン、日番谷、骸が一斉に言う。

「もはや人間扱いすらされてねえのか！？」

リボーンはそうツツコミを入れる。

リオンが並森に来たのはちょうど黒曜組との戦いとき。

（思えばアレからだな…ツナ達が真っ黒になったのは…）

リボーンは明後日の方向を見て現実逃避に移ろうかと考えていた。

「そつだ、例の事調べたか？」

リボーンが現実逃避を始めようとしたそのとき、タイミングがいいのか悪いのか、リオンが例の事と言ってリボーンに話しかけてきた。

「ああ…。しかし『この学校で麻薬の取引が行われていた』とはな…」

そう。姫川は飴やラムネに催眠薬や麻薬などを大量に混入していたのだ。

「麻薬…！？」

雷斗が驚く。

「ああ。あの女は生徒達にこっそり飴とかの菓子に麻薬を大量に混入していたんだ。そして全員には催眠薬入りの菓子を渡して催眠状態にしたんだろうな。」

「それで正しい判断すら出来なかったのか…」

日番谷が納得した顔で言う。

「ああ。でもいくら催眠状態にさせられていたからといっても《やったのはあいつら自身》だ。だから復讐対象から外す訳じゃない。」

「そうか…」

「あ、もうチャイムが鳴るころだぞ。」

「うええ！？ヤバッ！奈々さん特性弁当早く食わなきゃ！」

「俺も忘れていた。」

「守、じゃなかった！雷斗も急げ！！」

そして更に時間は過ぎ放課後…

「練習には俺、あの廃棄物と会ってから行くよ。」

リオンはそう言うと言つと屋上へと向かう。

屋上では骸とクロームがカメラを構えスタンバイしていた。

まだ姫川は来ていない。

数十分後

「ゴメエーン。待ったあゝ？」

「ううん。そんなことないよ。（自分から呼び出しとして待たせるたあいい度胸じゃねえかこの歩く汚染廃棄物！）」

心の中で毒舌を吐くリオン。

「で？用って何？」

リオンはとつさにポケットに隠し持っていた小型の録音機を操作する。

「あのねえゝそのおゝ私、初めて会った時からリオン君のことが好きだったのおゝ。だからあ付き合って欲しいのおゝ」

顔を赤らめ言う姫川にリオンはコンマ0・111の間もなく答えた。

「無理。ヤダ。」

「んな！？な、何でえゝ？」

「え？その香水の臭いが嫌い、その化粧の濃さが嫌だ、その腐った精根が嫌だ、その存在自体が嫌だ。」

見事に言い負かすリオン。

「何ですってええええ！！もう許さないわ！こんんなに可愛い私が

付き合っでやるって言ってるのに断るですってええええ!!??」

「どこが？自意識過剰すぎだよ？一回精神科に行け、大丈夫。俺が
とっても腕の良い医者を紹介してやるから。」

「ちょっと！私を侮辱するのもいい加減にしなさい!!」

「え？侮辱されてとーぜん。だってこうやって円堂守も陥れたんだ
から。」

「な、何であんたがそれを!？」

「さっあねえー」

リオンが言つと姫川は自分の服を破り捨てる。

「私の告白を断ったこと、私を侮辱したことを後悔させてやるわ！
キヤアアアアアアアアア!!」

姫川は自分の制服を破き頬を叩く。

そして悲鳴を上げた。

生徒達がドヤドヤと屋上に来た。

姫川はすぐそばの女子生徒に泣きつく。

「ふえええー！リオン君が私に告白してえ…」

「何だと!??リオン、お前最低だな!」

「振られたから襲うなんて!!」

（なるほど、そうやって円堂守も陥れたのか…）

他の生徒にくつついてきた日番谷は冷静に分析する。

「はぁーい。ちょっと待った!。姫川は俺に叩かれたんだよね? ならどうして俺の手形がお前の頬についてる手形は俺の手と一致しないんだ?」

リオンはいつの間にか姫川の頬に手を当てていた。

明らかにリオンの手形のほうが大きい。

「あ、あれ? 本当だ…」

女子生徒が疑問を言う。

「な、何で!?!」

「なら姫川の手の大きさはどうだろうかねえ…（黒笑）」

ニヤリと笑って言うリオン。

姫川の手を頬に持ってきた。

「ちょ、止めて!」

「何でえ? 俺は事実確認してるだけだよ? それとも、事実確認され

ちやダメなことでもある？（超黒笑）

「そ、それはあゝ」

そして姫川の手と姫川の頬についていた手形はほぼ一致していた。

「それでも俺が姫川を襲ったとでも？ならこの手形はどうゆうことか説明願いたいねえゝ（超黒笑）」

ニコニコと笑って言うリオン（しかしその目は笑っていなかった）の言葉にグウの音も出ない生徒達。

「何もないの？じゃあ、俺は部活があるんでこれで！」

リオンは屋上から出る際に姫川にこつそりと耳打ちをした。

嘘つきには災いが降りかかるんだよ？惨めな姿をさらしたくなかったら嘘も程々になゝ

リオンをものすごい形相で姫川は睨みつけるがリオンは既に屋上を去っていた。

「リオン君…目にもの見せてやる！！私を敵に回したことを後悔することね！！！」

姫川は誰もいなくなった屋上で歪んだ笑みを浮かべた。

グラウンド

現在、グラウンドでは雷斗VSリオンという構図が出来上がっていた。

「風巻きジェット!!」

リオンの蹴ったボールは緑色の風を纏い周りの空気を巻き込みジェット機のような速さでゴールへと向かっていく。

「マジン・ザ・ハンド!!」

すると雷斗も必殺技を繰り出しオレンジ色の魔人を出現させた。

魔人が消え去ると雷斗の片手にはしっかりとボールが存在している。

「あちゃー止められちゃったぜ…」

「いいや、俺も危なかった。良いシュートだった。」

「そう?じゃあもつと威力を倍増すれば!」

「ああ。マジン・ザ・ハンドじゃもう止められないかもな。」

「つしゃあ!よーっし!やるぞおおお!!」

「元気がいいな2人とも。」

日番谷はニコニコと微笑ましくその様子を見ていた。

そして今日も普通に帰宅できる…

はずだった…。

しかしそれは闇の陰謀により崩れ去ることとなる。

練習を終えた豪炎寺達、雷門イレブンは姫川と分かれた後、途中まで一緒に帰っていた。

その途中、イナズマジャパンの虎丸と出会い河川敷で少しサッカーをしていると辺りは既に暗くなっており全員が急いで帰ろうとしたのだが…

「あれ？さっきもこの道通りませんでした？」

虎丸のその言葉で全員がハッと気づく。

先ほどから彼らは同じ場所を延々と回り続けていたのだ。

そして彼らの後ろからはヒタヒタという足音が…

気のせいだと思い無視するが足音はどんどん大きくなっていくばかり…

「…お、お、可笑いッスよ！」

壁山が震え上がる。

その言葉で全員がこれはただ事ではないと感じ始める。

「いっせーので振り向こうぜ。」

綱海はその意見に全員が賛成すると掛け声を上げた。

「せーっのー!!」

全員が振り向く。

そこには牙をむいた吸血鬼がいた。

「「「う、うわあああああ!!!!」」」

「「キヤアアアア!!!!」」

その場にいた全員が思わず悲鳴を上げる。

吸血鬼は漆黒の翼を使って豪炎寺達に襲い掛かった。

「逃げろー!!」

誰が発したかわからないその言葉で全員が逃げ出す。

が、何と吸血鬼の後ろ側にきてしまった。

そう、彼らに逃げ場などないのだ。

月が赤い色に変わる。

この空間ではもう、吸血鬼から逃れるすべはない。

大半の仲間が恐怖に体をガタガタと震わせる。

キシヤアアアアアアアアアアア！！

吸血鬼が雄たけびを上げ飛び掛ってきた。

「「「うわあああああ！！！！」」」

全員がもうダメだ！と思った瞬間。

ギヤアアアアアアアアアア！！

逆に吸血鬼の悲鳴が聞こえる。

恐る恐る目を開けるとそこには…

黒い着物を着、手に刀を持ったオレンジのバンダナの少年が中で浮かび吸血鬼を切り捨てていた。

チリリーン

軽やかでありどこか安心できる暖かさを持った鈴の音が当たりに響き渡り月光で少年の顔が見えた。

「俺の仲間に手え出すな！！」

それは紛れもなく、円堂守だった。

「円堂さん！？」

「響け、守りの鈴…！守鈴！」

円堂は解号を唱え霊圧を開放する。

そして刀の先を吸血鬼に向けた。

「ここはお前のいる場所じゃない。すぐに立ち去れ！」

ギヤオオオオオオオオオ！！

「通じない…もう人間の心がなくなっちゃったのか…。せめて、化物じゃなくて人間として逝かしてあげたかったけど…」

円堂はチャキリと刀を構える。

「俺は死神としてお前を倒す！！ハア！！」

円堂が刀を振りかざすと吸血鬼はどんどん切られていく。

ついにはピクリとも動かなくなった。

「フウ…。さて皆。」

「「「！」「」」」

返り血を少し浴びてしまった円堂が振り返るとその場にいた全員が体を硬直させる。

網海以外は…

「皆にはこのことを忘れてもらおうよ。」

「忘れる？」

「ああ。ちよつと記憶を改ざんするだけだから。俺のことやさっきのことみいーんな忘れちゃう。」

「ま、待ってくれ円堂！」

円堂が記憶を消そうとすると今度は大虚が現れた。

「何なんだあの化け物は！？」

「大虚！？何で！？くっそ、そこ動いちゃダメだからな！」

円堂はそう言うと瞬歩で大虚の近くへと行った。

「らいおんせいし雷音静止！！」

守鈴から稲妻が出現。

稲妻の鳴り響く音で大虚が一瞬止まる。

「よし、このまま一気に！！っ！？」

円堂は巨大な霊圧をいくつも感じ慌てて瞬歩でその場から離れる。

「んな！？メ、大虚が4体追加って…」

これで円堂を取り巻く大虚は5体となってしまった。

「マジ…？」

”ケタケタ…半人前ノ死神ガ、俺達『改造大虚』に勝テルト思ツタカ！”

「しゃ、喋ったあ！？」

”マダ貴様ハ死神ニナツテ間モナイヨウダナ…。ソナナ死神デハ我々『改造大虚』ニハ勝テヌ！！”

また別の大虚が話す。

”ソーダ！イイコト考エタア！アイツヲ僕ラニクレタヲ助ケテアゲル！”

「!？」

大虚の1体が提案を持ちかける。

しかし円堂はそれを：

「断る！」

ハッキリと断った。

「俺はあいつらの守護神なんだ！守護神が守るのはゴールだけじゃない！仲間も、チームメイトも守るんだ！」

”ドウヤラ殺サレタイラシイナ：ナラ才望ニ通り殺シテヤルヨ！”

大虚が一齐に爪を振るう。

「守鈴、らいげきけっかい雷撃結界！！！」

円堂が地面に守鈴を突き刺すと電気のバリアができる。

ギヤアアアアアアア！！

”痛い熱イ！！”

”ヨクモヤツタナア：！！！！”

「こっちはせーとーぼーえいつてのをやったまでだ！」

”小僧オオオオオオ！！”

円堂は大虚の攻撃をバリアに使っていた電気をあたりに放出させ防ぎさらにはダメージを与える。

グオオオオオオオオオ！！

「できた……！！隊長おー！一護さあん！恋次さあん！浦原さあん！俺できたぞおおおお！！！！」

円堂は暇を見つけては浦原商店の勉強部屋にてリオン、一護、恋次、浦原とともに修行しこの技・雷撃防らいげきぼう（原案・石田・命名・リボン）を得とくしたのだ。

”コノヨウナ死神二、我々『改造大虚』ガ負ケルモノカアアアアアア！！！！”

「え！？」

円堂は肝心なことを忘れていた。リボンから言われていた雷撃防の弱点を…

『雷撃防は電気を一斉放射するのに一点だけに集中しなければならぬ。しかし、この技は発動してから集中力を戻すのに時間が少しばかりかかる。』

『リボーン、それって…』

『リオンはわかったようだ。雷撃防は発動後、相手の攻撃を回避しにくくなるんだ。まあ、そこは修行で集中力を戻す早さは補えるだろうが完璧には無理だろうな…』

円堂はそれをすっかり忘れて雷撃防を放ってしまったのだ。

”コレデ、終ワリダ小僧オオオオオオ！！”

大虚の爪が円堂の頭上に降りかかる。

「マモルウウウウウウ！！！」

ロココが飛び出す。そして円堂を押し倒した。

「うわっ！」

「グアアアアアア！！！」

「「「ロココ！！」「」「」

円堂と雷門イレブンはロココの名を呼ぶ。

吹き飛ばされたロココは肩を深く切っていた。

「ロコ…コ…？ロココ！！！」

円堂が慌てて駆け寄ろうとすると大虚が口から霊圧の塊の弾を吐き

出す。

「じゃ、邪魔するな!!」

”君ノ所為デソノ子ガ壊レタンダヨ?ドウセ今ノデソノ子は君ノ顔
ナンテ見タクナクナツタハズ…”

「そんなことはないんじゃない?」

その声とともに巨大な霊圧が開放される。

”何者ダ!”

全員の視線が上空に向かう。

そこには…

「「「はい?」」」

犬のお面を被った少年がいた。

「な、何してるんだ、」…隊長…」

「ん?いいじゃん。犬可愛いし。」

「まあ、否定はしないけど…」

「否定って言葉知ってたのか?」

「ひでええ!!」

「まっ、とつとと片付けるぞ！」

お面の少年・リオンは風蘭を構えた。

「卍解…！！」

緑色の風がリオンの体を包み込む。

リオンが風蘭を横に振りかざすと風はブワリと辺りに散る。

リオンが持っていた風蘭は刃先が花卉の様にいくつも分かれていた。

”クククツ、ソナナ刀デ我々が倒セルモノカ！！”

「倒せるんだよなあ。これが！」

リオンがお面の中で目を瞑る。

「俺の卍解を…風蘭の進化系、おおかぜらんまい大風蘭舞をなめんなよ？ふうかざんまい風華斬舞！！」

卍解した風蘭、大風蘭舞の刃先から刃物の花卉が無数に現れる。

そしてそれは風に乗り高速で飛び回り大虚をあちらこちらから串刺しにした。

あまりにも呆気なかった。

これこそが総隊長も上回る実力を持つ死神…四季リオンの本気だっ

た…。

一瞬で大虚達が消え去った。

「…ゴメンな。」

円堂が雷門イレブンに近づく。

それと同時に彼らの視界は暗転した。

「お兄ちゃん！朝だよ、起きてえ〜」

可愛い妹の声がした。

重い目蓋を開けるとそこには自分の妹である夕香の姿があった。

「お兄ちゃん帰ってきてからすぐ寝ちゃってさあ〜。」

帰ってきてからすぐに寝た？

豪炎寺は顎に手を当てて考える。

自分はさっきまで雷門の仲間と友に怪物に襲われていたはずだ。

そして…

（誰かと出会ったはず…。とても大事な誰かと…）

豪炎寺はそこだけが思い出せない。

記憶の中の自分や他の仲間が話しているはずの相手はそこにはおらずただ景色だけしか残っていなかった。

「夢才チであの騒ぎ終わらせてきたのおおおお！？」

浦原商店でツナの声が響く。

「ああ。そっちのほうの手っ取り早いし。」

「私も最初、特定の相手の記憶を消すあの鎌（劇場版BLEACH Fade to Black 君の名を呼ぶを参照）のような道具を作れて言われたときは無茶だと思いましたけどね、スパナさんやボンゴレの皆さんの協力のお陰ですよ。」

彼らは大虚を退治した後浦原商店にてロココを治療。その後、ロココを家へと連れて行き円堂の記憶だけを消したのだ。

他のイレブン（綱海除外）も同様、今回の事件の円堂の記憶を消した。

「それにしても…改造大虚とは一体何なんだ？」

「代行の俺が知ってるわけないだろ。」

滅却師・石田雨竜クインシーの言葉に一護はそう答える。

「あんな記憶、なくてもいいもんな。」

円堂が静かに言う浦原はそんな円堂を見て思った。

（実はね円堂さん。記憶はこの一件終了後に戻ってしまうんですよ。しかも、彼らは絶対的な信頼を彼方に寄せている。この一件が終了する前に記憶が戻るのは時間の問題です。）

それは円堂にとっては喜ぶべきであり悲しむべき事実。

しかし、雷門イレブンにとってはきっと円堂が現世では死んでいても戸魂門では生きていると言う嬉しい事実を確信させる引き金となるであろう。

「さすがですね。彼方が作った改造大虚は。」

「フツ、この改造大虚は戦闘力を大幅にアップしたものだからな。」

「その調子で実験を続けてください。この改造大虚が完成さえすれば隊長クラスの死神すら倒せる！！そして総隊長である山本元柳斎をも束になれば手も足も出ないでしょう！！素晴らしいッ！！」

「必ずこの改造大虚を完成させますよ。」

「頼みましたよ、『影山』さん。」

尸魂門と現世に迫りし闇の陰謀と危機はすぐそこまで迫っていた…

標的7 闇の陰謀と大虚と風の本気（後書き）

影山が何故生きてるかなどは本編で明かしたいと思います。

次回

「あの円堂大介の孫、円堂守はお前じゃないのか？」

「ここで円堂はずっとゴッドハンドを会得するために練習していたんだ。」

「とつと成仏しろやこの悪霊！！」

「ナミモリーヌのケーキはすっげえ美味いんだ！」

「遊びに行こうぜ！」

『死神と遊園地と敵対ファミリーの襲撃』

標的 8 死神と遊園地と敵対ファミリーの襲撃（前書き）

死神となった少年はアサリの初代から遊戯への券を貰い受ける。

死神となった少年は死神の少年に彗星の少年を誘い外へと出かける。

しかし彗星の少年には魔の手がすぐそこまで迫っていたのだ…

標的8 死神と遊園地と敵対ファミリーの襲撃

ある日雷斗を尋ねて来たのは刑事である鬼瓦だった。

「本当にそつくりだな。」

「…用件は？」

仏頂面で用件を聞く雷斗。

「ん？お前はイナズマイレブンを知ってるか？」

「っ！イナズマイレブンって何ですか？」

憧れの昔の雷門サッカー部の異名を聞いて一瞬動揺した雷斗だったがすぐに落ち着きを取り戻して知らぬ振りをした。

「昔の雷門サッカー部の異名だよ。彼らの試合はまるで稲妻が走るようなプレーだった…。お前も知ってるはずだ。憧れだったんだろっ？」

「！」

「ハハッ、やっぱりな。その顔見りゃ一発で演技かどうかなんてわかるさ。俺は刑事だからな！」

「…」

雷斗は自分が円堂守だと鬼瓦刑事にバレても黙っていた。

「死んだはずのお前が何でここにいるのかは追求しないが、確認しておく。あの円堂大介の孫、円堂守はお前じゃないのか？」

「……」

しばらくの沈黙。先に答えたのは円堂だった。

「ハア、やっぱり刑事さんには敵わないや。」

円堂は飴玉の効果を自主的に切り素に戻った。

「このことは豪炎寺達には秘密で！」

「ああ。だが、いつか絶対訳を話してくれよ？」

「わかったよ、約束！」

こうして円堂の生を知る新たな仲間が増えた。

リオンは鉄塔に来てタイヤがぶら下がっている木を撫でた。

「ここが守と雷門サッカー部の原点みたいな場所か……」

目を閉じれば修行と学校と死神業の合間にボールを蹴っている円堂の姿が浮かび上がる。

その真っ直ぐな姿は誰もを引きつける。そして温かな心で全てを包み込む。

大空のツナとは違う…太陽。そう、彼は太陽なんだ。

そしてその太陽に惹かれた者達は太陽に絶対的な信頼を寄せていた。

「守は絶対もう一度、円堂守としてフィールドに立たせるんだ！そして、俺は許さねえぞ汚染廃棄物女…！こんなに綺麗な太陽と雷達の友情を汚した者としてのお前を悪徳マフィアのローザファミリーの令嬢としてのお前を…！」

「リオン君！」

「っ！」

リオンはハッと後ろを振り向く。

そこには豪炎寺、鬼道、フィディオ、ロココ、ヒロトがいた。

「何だ？」

「今の、どういふことなのさ…？」

「今の？」

「惚けないでくれ。今の独り言は…」

「ヒメカワが悪徳マフィアの令嬢って…」

ヒロト、豪炎寺、フィディオの質問攻めにリオンは普通に振舞った。

「ああ、あれか。今度のお芝居で使うセリフ。ちょっとム力ついたあの女で代理してやってみたんだ！どう、俺の演技力！」

「そ、そうだったの！？」

ロココは騙されたあゝと頭を抱える。

「ところでここって何なの？」

そこから一気に話題転換。

「ここは円堂の…雷門のGKで俺達の太陽だった円堂守の練習場所だ。」

「練習…」

「ああ。ここで円堂はずっとゴッドハンドを会得するために練習してたんだ。」

「ああ、雷斗が使う必殺技か…お、もう帰る時間だ！じゃな！」

「ああ。また明日。」

リオンが去っていくときフィディオは豪炎寺やロココに肩を貸してもらい帰ろうとした。

しかしそんな中、彼は木の幹のあるものを見つけた。

「あれ？これって…」

『これを見つけし者へ

汝は男か女か、大人か子供か、偽りの姫を信ずる者か、それとも太陽の王を信ずる者か。

誰でも良い。しかし現在この町で起っている異変はまもなくこの町に、世界に大きな災いを齎すであろう。

もうじきこの町には風の王が参上する。

彼は太陽の王の闇を照らす聖なる光。

アサリと死神を引き連れ偽りと言う名の闇を真実と言う名の光で照らし出すであろう。

風の王は太陽の王、雷達の守護神を信ずる者に幸福を。

偽りの姫を信ずる者には裁きの鉄槌を下すであろう。

これを読んだ者が偽りの姫を信ずる者ならば、時間は残されてはいない。

一刻も早く真実に気づくのだ。それしか、裁きの鉄槌を回避する方法はない。』

フィディオには少ししか読めなかった。

「シュウヤ、これなんて読むんだ？」

フィディオは豪炎寺を手招きすると幹の文字を指差す。

「これは…」

豪炎寺はスラスラと読み進めていく。

鬼道やロココ、ヒロトはその言葉の意味を解読しようと頭を捻った。

ほとんどわかる。が、わからぬ所がいくつかあるのだ。

『アサリと死神を引き連れ』『雷達の守護神』『この町で起こっている異変』

「アサリと死神とはいったいどういう意味だ？」

「わからないよ。死神は…裁きの鉄槌とか何とか言ってるしその偽りの姫って言う人を信じてる人達の魂を狩らせるために連れて来るんじゃない？」

ヒロトのSFチックな案にならアサリは？と一同は聞く。

「さあ？」

ヒロトのお手上げのポーズを見た一同の中ではい！と手を上げた者がいた。

ロココだ。

「雷達の守護神、これって雷門のG Kを意味してるんじゃないかな？」

「『『そうか!!』『』」

全員が顔を見合わせる。

「G Kは別名、守護神とも呼ばれる。そして雷達は達というところから複数の人間を意味している。」

「そしてこの町でとか書いてあるから、この町に住む人達以外に達がつきそうなくらい大勢の人間が集まるところ！」

「守護神という文字からそれは」

「『『雷門のサッカー部に絞られる!!』『』」

全員がハモると豪炎寺は静かに言う。

「そして守護神、G Kか…」

「雷門に今いるG Kは立向居、雷斗、ロココの3人だな。」

「うん。でも太陽の王ってどっかで…ああ!!」

フィディオが大声を上げる。

「どうした!？」

「お、思い出した…。並森に行ったとき、風の王を俺達探してたよね？で、この文章にも風の王が参上するって、風紀委員さんの言った太陽の王ってのもこの文章にある！」

「つまり…最近転校してきたやつらの中に風の王がいる可能性は高い！！」

鬼道の言葉にロココが続ける。

「そういえば風の王は並森中に通っているんだよね！？リオンとライトとトウシロウは全員並森から転校してきたんだ！！」

「つまり、彼らの3人の中のうち1人が…」

ヒロトの言葉に全員が続けるように言う。

「『風の王…』」

「やっぱり怪しいのは風を使った必殺技を使用するリオンだろうな…」

「風の王って太陽の王に危険が迫らないようにしてるんだよね？なら太陽の王も一緒に来てるかも…」

「太陽の王っぽいって…ライトかな？」

「とりあえず今のところはこうだな。」

フィディオの言葉に頷きながら鬼道はいつの間にか取っていたメモを見せる。そこには…

リオン↓風の王の可能性大

雷斗↓風の王の可能性小・太陽の王の可能性有り

日番谷↓風の王の可能性小・太陽の王の可能性小

「リオンは姫川の嘘を追及したとき楽しそうな笑みを浮かべていた。偽りの姫とは多分、姫川のことだからその嘘を暴こうとしている風の王がリオンの可能性は大。残りの2人のうち誰かが太陽の王であつても残りも」

「グルかもしれないってわけか…」

鬼道の言葉にヒロトが続ける。

「この町で起きてる異変か…。俺、実は昨日変な夢を見たんだ。」

「あ！俺も！」

「俺もだ。」

「俺もなんだけど…」

豪炎寺の言葉を最初にその場にいた全員が自分も同じ夢を見たという。

「何か大切な奴がいたはずなんだ。でもそいつのことを思いだそう

とすると頭が痛くなる。」

「何か強制的に忘れさせられた感じだな。」

ロココの言葉に全員がハツとする。

「もし昨日の夢が…」

「夢じゃなかったら…」

「それがこの町で起きている異変!」「」

「まとめるとこうなるな…。現在この町で起こっている異変というのは俺達の夢だと思っていた現実でそれがまもなく、世界に大きな災いを呼ぶということだ。そしてこの町には風の王が参上する。これは転校生の中にいる誰かが風の王でそいつは雷門のGKを包む偽りの闇を照らす聖なる光…つまり真実だ。」

「アサリと死神を引き連れっというのは?」

「わからない。だが風の王は太陽の王、雷達の守護神を信ずる者に幸福を。とある。これは雷門のGKを信じる者には幸福を与え、偽りの姫…姫川を信じる者には裁きの鉄槌を下す。つまりサッカー部を抜いたほとんどの雷門の生徒が風の王の手によって酷い目に合うということだ。」

「てこととなると、これ呼んだ者が偽りの姫を信ずる者ならば、時間は残されていない。一刻も早く真実に気づくのだ。それしか、裁きの鉄槌を回避する方法はない。これは誰かが俺達以外の雷門の人間に当てて書いたメッセーシカ…」

豪炎寺が静かに言う。

「イタズラにしてはほっとけない部分がいくつかあるし…。」

「あのさ、ジヨウスケが彼らが転校してくる時期とほぼ同じ時期で俺達にボタン型の小型カメラを渡してきたよね？」

フィディオの言葉に全員の頭にある可能性が浮かび上がる。

「綱海もグルかもしれない…」

『よくぞ気づいたな雷の子供達よ…』

全員が後ろから聞こえた声の方向に顔を向ける。しかしそこには…

誰もいなかった。

リオン達がツナの家に遊びに行くとツナそっくりのドッペルゲンガーもとい初代ボンゴレ・プリーモが居座ってのんきにお茶を飲んでいた。

「おお、よくぞ来たなグリーンウィンドよ！」

グリーンウィンド…リオンが裏社会で呼ばれている通り名だ。

最近出てきた凄腕の情報屋で風のように情報をすぐ集めることからこの呼び名がついた。

グリーンは…リオンが風の守護者で武器が緑の扇子ということから

「「…」」

雷斗…円堂と日番谷はツナそっくりの人間に口をポカンと開け、リオンとツナは始終無言。

そしてリオンとツナは無言でしたの解から何かをとってきた。

リオンは大量の塩が入った袋を、ツナはイクスグローブをはめた。額には死ぬ気の炎。

そしてリオンはその塩を初代の頭の上からぶっかけようとしていた。

「ま、待て待て待てグリーンウィンドよ！！」

「「黙れ！とつと成仏しろやこの悪霊！！」」

そう言いきるリオンとツナ。

「おい、ストップ！！初代はかりにもツナのご先祖だぞ！？」

「「チッ」」

（ツナもここまで黒くなったか…）

「それより、何で出てきやがった初代。」

「いや、そなたがそこにいる太陽の王を保護したのを知ってな、その子の心の傷を癒すためにもこれを…」

初代が手渡したのはマフィアランド…ではなく普通の遊園地のチケットであつた。

ペアチケットが7枚ほど…

「では、私はこれで。」

初代はそう言うと言えた。

「い、今のは!？」

「初代ボンゴレボス、プリーモだ。ツナが身に着けている指輪、ボンゴレリングには歴代ボンゴレボス達の魂が宿ってる。そしてその意思はたまゑに表に出るんだ。頻繁に出てくるのが初代だけだな…」

「しょっちゅう出てくるのか!？」

日番谷が驚く。

「ああ。ぶっちゃけ言って迷惑だよ。」

ツナが苦笑いしながら言う。

「孫馬鹿ピヨン。」

ツナの部屋には黒曜組と獄寺、山本がいた。

「それにしてもこれ誰と行く？」

「雷門の人達を数人誘ったら？」

「じゃあ5名ほど誘うか。」

「バジルとかどうかな？日本のお化け屋敷に入ってみたいって言うていたのな。」

「フィディオを連れて行きたい！」

「じゃあこんな感じでどう？」

リオンは紙を見せる。

・リオン

・守

・とーしろー

・ツナ

・獄寺

・山本

・骸

・クローム

・バジル

・フィディオ

・その他雷門4名

「OK！」

全員が言う。

「じゃあ…」

そして次の日

「遊ぶに行こうぜ！」

「」「何故に！？」」

リオンは部室に入るなりそう言い部員達を困惑させた。

「知り合いに遊園地のチケットをもらった。先着4名だ。」

「ちなみにフィディオは既に決定だ。拒否権は無い。」

雷斗がチケットを出し日番谷がフィディオの決定済み伝える。

「お、俺!？」

「雷斗、フィディオの説得頼むぜ」

「連れて行くと言い出したのはお前なんだからな。」

「え?え?」

フィディオが目を白黒させていると雷斗が目の前に来ていた。

「…遊園地と一緒に行く。」

「え?う、うん。いいよ。」

「…」

雷斗は黙ったまま小さくガッツポーズをした。

「行動ですぐに感情がわかるよな雷斗って…」

リオンが言う。

「で、残りの4名は俺と豪炎寺だ。」おろ?」

鬼道が発言したことで今度は風丸が…

「俺も行く。」

そして立向居が…

「行きます！行かせてください！」

と言い出した。

「よし、これで決まりだな。じゃ、チケットは俺達が当日持つてくるから今週の日曜日の８時に雷門中の正門前で！」

彼らは後々これもリオンの布石だということに気づく。

日曜日

「よっほー！」

雷門の制服を着ておらず私服のメンバーを見るとリオンは新鮮だなあ、と思った。

「遅くなった。」

「いや。大丈夫だ。」

静かに話す雷斗を見て風丸以外はやっぱり円堂とは違う。と考えていた。

「じゃ、誰と回る？さすがに大勢じゃ迷惑だろうしグループ作ろうと思うてるんだけど。あ、フィディオは雷斗と回るの決定ね。」

「ええ！？」

「俺は雷斗と…」

「俺はリオンとだ。」

そしてこうなった。

リオン・鬼道・豪炎寺

雷斗・風丸・フィディオ・バジル

日番谷・立向居

ツナ・獄寺・山本

骸・クローム

遊園地前で待っていたのはツナ達一行だった。

「リオン！雷斗！とうしろ！こっちななな！」

「うつせえぞ野球馬鹿！」

「アハハハッ、リオン君こっちこっち！」

ツナ達のもとに駆け寄るリオン。

「あ、紹介するぜ！並森中の友達、沢田綱吉ことツナ！イタリアから来た獄寺隼人！野球部のエース、山本武！黒曜中学生会長、パイ

ナッポーこと六道骸！で、クローム！クロームって名乗ってるけど本名は凧っていうんだ。でもクロームって呼んでやってくれ！」

「は、初めまして！沢田綱吉です…」

「チツ、獄寺隼人だ。」

「山本武っつーんだ。よろしくなのな」

「クフフフ…六道骸です。それにしてもリオン君、いい加減パイナッポーは止めてください！泣きますよ！？」

「気持ち悪いから止める。」

「クフン…」

「骸様、元気出して。クローム髑髏。よろしく。」

全員が自己紹介を終えると同時にバジルが走ってきた。

「沢田殿！四季殿！お待たせしたでござる！」

「あ、バジル！こいつはバジル。ツナのお父さんの部下ってところかな？」

「拙者の名はバジルと申す。四季殿から話は聞いているでござる。よろしくでござる、豪炎寺殿！鬼道殿！風丸殿！立向居殿！フィデイオ殿！特に同じイタリア人として仲良くしてほしいでござる！」

「う、うん。よろしく…」

フィディオは若干バジルに引きながらも挨拶を交わした。

それからはそれぞれが別行動をした。

本来これはフィディオと円堂の心の傷を少しでも癒すためのものだったのだが…

「おお！ナミモリーヌの店が出てる！知ってるか！？ナミモリーヌのケーキはすっげえ美味いんだぜ！」

「そ、そうか…」

「あれがお化け屋敷でござるか！」

「う、うん。」

結局リオンとバジルが大はしゃぎしていたのであった。

しかしそんな彼らを見ている影が一つ…

『こちらターゲットを確認。今から始末しに向かいます。』

『了解。他の一般人に迷惑をかけないようにしろよ。』

『了解。』

男が手に持った紙にはフィディオの顔写真が…

そして別の手には銃を持っていた。

「恨むなよ、フィディオ・アルデナ。俺は殺し屋だからな。依頼をこなすだけだ…。恨むなら自分の不運を恨め。」

男はそう呟くと円堂達の入って行ったお化け屋敷へと入って行った。

標的8 死神と遊園地と敵対ファミリーの襲撃（後書き）

次回

「伏せて！」

「てめえ…許さねえぞ！」

「死ぬ気の炎だと！？」

「は、跳ね馬デイナー！？」

「俺をボンゴレに入れてくれ！！！」

『闇からの奇襲 守護神VS殺し屋』

標的9 闇からの奇襲 守護神VS殺し屋（前書き）

彗星の少年に迫る魔の手。

彗星の壮年を守るため、太陽の死神少年の力が解放される…！

標的9 闇からの奇襲 守護神VS殺し屋

『ハッキング成功だ。』

『じゃあ、一般人を外にだ。』

そして放送が流れ始めた。

『緊急事態発生、緊急事態発生。ただちに一般人の方々は外へと非難してください。』

これは全員に聞こえていた。

お化け屋敷にいる者意外は…

（外が静か過ぎるでござる…）

バジルはいち早くそれを察知した。

「えん…雷斗殿、雷斗殿。」

バジルは自分の前を歩いていた雷斗を呼び止めた。

「…何かおかしいでござる。外から人の気配がなくなったでござる。」

「何だつて？」

「変わりに殺気が向けられているでござる。」

「姫川か!？」

「わからぬでござるが…。これは殺し屋の、ヒットマンが向ける殺気と同じでござる。」

「殺し屋…。とにかく速くここから出てフィディオ達を人の多い場所に連れて行こう。」

雷斗が何となく上を向くとそこには…

「!?!皆、伏せて!」

銃口があつた。

雷斗はとっさに全員を地面に伏せさせる。

バンッバンッバンッ!!

銃声が鳴り響きマフィア関係者ではない風丸とフィディオは恐怖した。

「い、今のつて…」

「皆は急いで出口に向かって。バジルも。俺が囿になる。」

雷斗の言葉に風丸とフィディオをは反対した。

「ダメだよライト!」

「そうだ！」

「わかったでござる。雷斗殿。これを。」

バジルは雷斗にボンゴレのエンブレム形のボタンのついた筒を渡す。

「決してご無理はせずに！」

バジルはそう言つと風丸とフィディオを抱えて走って行つた。

「お、おい離せー!!」

「ライト、ライトオーー!!!!」

ライトは彼らを眼で見送ると筒の真ん中のボンゴレのエンブレムの形のボタンを押した。

> i 2 8 2 9 1 — 7 4 3 3 0 <

するとたちまち棒のようなものが飛び出てロッドとなった。

色は黄色、青、赤、オレンジが使われている。

「ロッドか…いくぞ…!!」

雷斗はロッドを持ち銃を持っていた殺し屋に飛び掛っていく。

ロッドを刀の要領で振り下ろすと殺し屋は銃を投げ捨ててその場から回避した。

そしてハンドガンを持ち銃を連射する。

雷斗はロッドをバトンのように前で回し弾丸を弾いた。

（守りたい……！！フィディオ達を、皆を、死ぬ気で守りたい……！！）

雷斗がそう願うとロッドの先から炎が出る。オレンジの、大空属性の死ぬ気の炎だった。

「いけ……！」

雷斗がロッドを振るうとロッドの先に灯った死ぬ気の炎が巨大な火の玉となりいくつも殺し屋に飛んでいった。それはまさに火炎弾というに相応しいであろう。

「ぐわあ……！死ぬ気の炎だと……！」

そのうちいくつかが殺し屋に当たる。

その中の1つは殺し屋の腕にあたり銃を手放させた。

「てめえ……許さねえぞ！ハアアアア……！！！」

雷斗は殺し屋の懷に飛び込みロッドの先で男の顎を強く突いた。

「ガハアアア……！」

殺し屋は起き上がろうとするが体がピクリと動くだけでほとんど何も出来ない。

雷斗はロッドを殺し屋のすぐ横の地面に突きつけ言い放った。

「お前の負けだ。」

「さすがだな円堂。」

声がしたほうに振り向くとそこにはリボーンがいた。

「お前のバトルセンスも凄いがサッカーだけしかやってこなかったお前のその隠れていたバトルセンスを開花させたリオンも凄いな。」

「このロッドはお前が…？」

「ああ。リオンから頼まれていたんだ。どんな武器がいいかがわからなくてお前が刀を使っているからロッドにしてみたんだ。それはやるぞ。俺とリオン、そしてボンゴレからのプレゼントだ。」

「裏社会最大のマフィアと世界最強を名乗る家庭教師かてきょうからプレゼントなんて俺も運がいいな。」

「どういたしましてだぞ。」

「おーい、雷斗くん！」

ツナ、リオン、獄寺が走って来た。

「さすが俺が見込んだだけのことはある！殺し屋を瞬殺か！」

「しかも死ぬ気の炎を出してたぞ。大空属性の。」

リボーンの言葉に全員が眼を見開いた。

「ま、マジ？」

「すげえよ大空属性なんて!!」

「全てを包み込む心の持ち主か…ケツ、不本意だが認めてやるぜ。」

全員が驚き認める。それが雷斗には嬉しかった。

そして決意した。

「ツナ、話しがある。俺を、俺をボンゴレに入れてくれ!!」

「ええ！？で、でも…」

ツナは言葉に詰まった。

雷斗のような純粋な人間のこれ以上裏社会に関わらせたくない。

その思いがあつたからこそだった。

「どんなつらいことにでも耐えてみせる！俺、守るために強くなりたい！！だから…お前のところなら強い人がたくさんいるだろう！？」

何時の間にか飴玉の効果は切れ円堂へと戻っていた。

「…」

「いいんじえねえの？」

「え！？」

「でもな守、人を殺さなきゃならねんだぞ？いいのかそれで？」

「……覚悟は出来てる。」

「わかった。お前をボンゴレの風の守護者である俺の右腕として認める。」

「り、リオン！？」

「いいじゃねえか。なっ？」

「…ハア、ちゃんと守ってあげてよね？」

「おう！」

ツナは渋々と了承した。

彼なら守ってくれると確信したからだった。

彼らはその後、何事もなかったかのようにバジル達と合流した。

今までの全ての会話を立向居に聞かれていたとも知らずに…

殺し屋の残党は逃げていた。

「チッ！まさかボンゴレの関係者だったとは…」

「おおっと、この先には行かせないぜ？」

明るい分陰気の男が鞭を持って出てきた。

「は、跳ね馬デイナーノ！？」

「お前らたしかDESTって言う殺し屋グループだっけ？誰に依頼をされたのか答えて欲しいんだけどな？」

「殺し屋は依頼主のプライバシーはきっちり守る！」

「あつそ、じゃあいけど…復讐者の皆さん！」

キャバッローネのボス・跳ね馬デイナーノが叫ぶと物陰から包帯を体中に巻いた黒尽くめの人、復讐者達が出てきて男に首輪をはめた。

「な、何故復讐者が！？」

「最後に言っておくぜ？あのフィディオってやつは一般人だ。」

「な、何だって！？」

「裏社会の人間が表社会、裏社会に欠片すら触れていない奴を傷つけようとしたのなら…わかるよな？」

「ヒイヒイヒイ！！！！た、助けてくれえ！！！」

標的9 闇からの奇襲 守護神VS殺し屋（後書き）

次回

「お願いします！本当のことを教えてください！円堂さん！！」

「俺は隣町の竹寿司って所で寿司食ってたんだけどな」

「フィディオ君の暗殺に失敗したですって！？」

「練習試合か」

「思い出したんです。全部…」

『魔王の少年に教えられし真実 死神の少年がつかむ新たな情報』

標的10 魔王の少年に教えられし真実 死神の少年がつかむ新たな情報（前書

魔王の少年は太陽の死神少年に真実を教えてくれと迫る。

その頃、死神の少年は新たな憎き姫の本性をつかむことに成功していた。

標的10 魔王の少年に教えられし真実 死神の少年がつかむ新たな情報

「お願いします！本当のことを教えてください！円堂さん！！」

円堂いや、雷斗は立向居に呼び出されていた。

「何のことだ円堂って？」

「あくまで白を切るつもりですか…俺、思い出したんです。全部…あの夜の赤い月の日のことを！！」

「っ！！」

雷斗は動揺した。

記憶はもう戻らないと教えられていたからだ。

「それに彼方は守とは一言も口に出していないのに円堂という単語だけで円堂守という単語に結びつけた！それは何故か！彼方が円堂さんだからだ！あれは自分はここに居るという合図だったんですよ？円堂さん！」

「っっ！！」

「円堂なんて苗字はそこら辺何処にでも居ますけど彼方はその中から何故、守という単語をその苗字と結び付けたんですか！？」

「そ、それは…」

完全に立向居のペースに乗せられたこの場の分陰気。

逃げるわけにはいかなかった。逃げたら自分が円堂守ということを認めてしまったようなものだから。

「そこまでだ！」

声が響く。

ハッと2人が振り向くとそこには綱海が立っていた。

「円堂、立向居はお前の言うことは絶対聞くから大丈夫だよ！」

「ハア、綱海く折角言い訳考えてたのにさ」

「いいじゃねえか。どうせ良いのが思いつかなかったんだろっ？」

「ハハハハッ……」

乾いた笑い声を上げる雷斗は既に飴玉の効果を切って元の円堂に戻っていた。

「さすが立向居。隠し通せるはずなかったな」

ニコニコと太陽の笑みを浮かべる円堂。

「円堂さん……う、うつつ、円堂さああん……」

立向居は円堂に抱きついた。

「うおわぁ！？」

「お、俺彼方が死んだって聞いたとき…うつぐ目の前が…ひつく…真っ暗になって…とにかくとにかく凄く悲しかったんです!!」

円堂は涙声で言葉を続ける立向居の背中をポンポンと叩くと自分から引き離し謝罪の言葉を述べた。

「ゴメンな。実は…」

円堂は現在、死神としてリオンと一緒の隊に入っているのだということ、リオンの右腕としてマフィアに入っていること、そして自分の正体は決してバラすなと言われていること等々を話した。

「ま、マフィアに死神ですか…何だか凄い世界にはいつてますね…」

立向居は啞然として言った。

それに円堂と綱海は苦笑いする。

「俺も最初はんな馬鹿なっと思ったぜ?でも円堂がここにいることの証明には十分だし信じたんだ。」

綱海がそう言うのと立向居も言う。

「お、俺は信じます!それに死神になってもマフィアになっても円堂さんだっただけには変わりないですし、またサッカーと一緒にしてるのだって事実ですから!」

「そっか、ありがとな!」

円堂はニカリと笑うとリオンが呼んでいるんだ。じゃあな！と言いついて行った。

「リオンさんは円堂さんの無実を晴らしてくれますよね？」

「ああ。きつとだ！」

立向居は心配そうに綱海に聞き綱海は元気よく答えた。

「そうだな…よし！」

その頃リオンは愚かなる騎士と偽りの姫の策を封じる手立てを考えていた。

「なにやら楽しそうですね？」

骸が霧の中から現れる。

「うん。骸も来る？どうせ明日は麻薬の取引が行われる日じゃないさ。」

「ええ。お邪魔させていただきましたよ。クフフ…」

「今日までのちょっとした準備運動さ。これからは今まで散々俺の部下の守を好き勝手やってきた醜きお姫様への反撃開始といこうじゃないか。」

リオンはニヤリと笑みを浮かべた。

その日、雷斗は綺麗なストラップを身につけていた。

それはローラが目付けそうなオレンジの薔薇のストラップ。

「い、嫌、止めてええええええ!!」

ローラは雷斗が人気のないところへ来ると叫んだ。

「え？」

雷斗が振り向くとそこには既に人が集まっていた。

「おい、お前、ローラちゃんのストラップ取ったんだってな!!」

「最低!返さないよ!」

「え?え?」

困惑しながらも自分を落ち着けると雷斗は反撃に出ようとした。

立向居が人ごみの中ハラハラしながら見守っている。

「ハア…お前ら馬鹿か?これは俺がリオンと(上司部下と友情の証に)お揃いで買ったストラップだ。」

「嘘付け!そんな嘘には「あ、雷斗!やっぱり学校でも着けてくれたんだな薔薇のストラップ!」え?」

割って入ってきたのはリオンだった。

「何?」

「そ、それはローサちゃんのじゃないのか？」

リオンは？マークを浮かべるとすぐに状況を理解し答えた。

「これは俺と雷斗が色違いで買ったやつだぜ？ほら。」

リオンは緑の薔薇のストラップを見せた。

「ちなみにとーしろーも買ってるぜ？」

何処からか日番谷が現れ白い薔薇のストラップを見せる。

「で、でもお、薔薇のストラップなんて何処にでもあるしい…」

「いやいや、これは特別に金をかけてオーダーメイドで作ってもらったんだ。何ならはめてみる？」

ストラップは指輪上になっており指にはめられるようになっていた。

姫川はそれをはめる。

明らかにサイズが合っていなかった。

「オーダーメイドで作ってあの店はすぐにその場ではめられる様にしてくれるのに何でお前のは指のサイズが合っていないのかな？」

（黒笑）

「つ~~~~~!!」

「これに懲りたらもうハイエナのように人のモン取るなよ。」

リオンは雷斗と日番谷と去って行った。

その場には気まずい沈黙が残った。

放課後、リオンは雷斗や日番谷はもちろん雷門サッカー部のほとんどの人間を連れて並森町の寿司屋、竹寿司に来ていた。

「ここだよ。すっげえ美味しい寿司握ってくれんだ！」

リオンはそう言つと暖簾を潜った。

「へい、らっしやい！つて、リオン君じゃねえか！元気してたか？」

「あ、山本のお父さん！お久しぶりです！」

「ああつて、昨日も会つたじゃねえか銀髪の兄ちゃん連れてよお。」

「ああ、ギン兄のことかあゝあ、こっちは俺の友達の雷門サッカー部の子達だ。」

「へえ！あのFFで優勝したチームの子達かあ。随分と立派になりやがつてよお！」

竹寿司の主人・山本のお父さんがリオンの背を叩いた。

「い、痛いよ山本のお父さん…あ！皆、早く座って座って！山本のお父さんの握る寿司は絶品なんだからな！山本のお父さん、甘エビ頂戴！」

「合点承知！甘エビだな！いつも通り2皿でか？」

「うん！」

「俺はカップ巻き。」

「俺はイ力で。」

席に着いてリオンは注文をする。

他の人間も急いで席に着き注文をした。

「あ、リオン！」

「おお、ツナに獄寺に山本！」

そしてその日、2時間ほど寿司に舌鼓をうっていた。

ちなみに竹寿司は大繁盛だったとか。

次の日、姫川はリオンにイジメられたと言いふらしたらしく口々にリオンを攻め立てた。

しかしとうぜんリオンは黙っているような性格ではなく…

「なら、いつぐらに俺は姫川をイジメたんだ？」

「ええつとおゝ5時半ごろにケーキ屋さんの前でえ…ひっく…」

「へえ？そりや可笑しいな、俺は《雷門イレブンの皆と俺は隣町の竹寿司つて所で寿司食つてた》んだけどな。な！豪炎寺君？」

「あ、ああちょうど7時くらいまでそこで寿司を食べていたが…」

「「「え？」「」」」

全員が目が丸くなる。

「それでいつ、どこで、誰が、誰をイジメたんだっけ？」

「つ~~~~~~~~!!!!!!」

姫川は唇を噛み締める。

「じゃ、俺がそれでどうやって姫川をイジメられたか教えてよ？」

リオンがそう言うと同時にチャイムがなりその話はお流れに。しかし生徒達の疑惑を膨らませるには十分だった。

「何ですって!？」

姫川は電話で部下と連絡を取っていた。

「フィディオ君の暗殺に失敗したですって!？フィディオ君は今日は家で療養中…しかもヴァリアーが家の周りを見張ってる!？冗談じゃないわ!これじゃあフィディオ君の暗殺なんて出来ないじゃない

い!!」

姫川は地団太踏んで悔しかった。

その姿を幻術で姿を隠したクロームに録られているということも露知らずに。

「次の練習試合は。。。中学とだ。」

響監督から告げられた言葉に普通は胸を躍らせるはずの雷門イレブンだが最近は乗り気の間人は少なくなった。

響監督はその様子を見ると溜息をつく。

その中5人、リオン、雷斗、日番谷、綱海、立向居は練習を楽しみにしていた。

「練習試合か」

「どんな技を使う学校なんだろうな!？」

「さあな。」

「きっと雷斗さんの必殺技で止められますよ!」

「立向居も頑張ってくれなきゃな。」

「「「あははははは！」「」「」

（そろそろ、つーかもう真実を暴露しちゃうかな。これ以上バレたくないし…）

真実の光はすぐ目の前の闇を照らそうとしていた。

次回

「「フィディオ！」」

「この馬鹿げた舞台に終止符を打たせてもらおう！」

「マモル…か？」

「フィディオ。大丈夫か？」

「安心しろ。この馬鹿げた人形劇はもう終わるんだ！」

『彗星を護りし2人の少年 終止符を打つ直前』

標的 1 1 彗星を護りし 2 人の少年 終止符を打つ直前（前書き）

さあさあ、終結はもうすぐそこだ。

醜きお姫様の仮面をこの手で…

ハガシテアゲルヨ。

「本当にあの世に来たんですね…」

「なんか昔の町みたいだな…」

リオンの言葉をスルーし立向居と綱海はキョロキョロと辺りを見渡す。

「リオン！いい加減に生きている人間をこっちに連れてくるのは止めろって何回言ったらわかるんだ！！」

「えー」

日番谷の説教をスルーしリオンは近くの果物屋のおばちゃんに声をかけた。

「おっぱちゃん！林檎を5つ、くださいな」

「あいよ。おやおや、また現世の人を連れてきたのかい？しかも今度はツナちゃん達じゃないのかい？」

「おう！今度は円堂の友達なんだぜ！」

「へえそうなのかい！それよりまだ守ちゃんの無実を証明してあげないのかい？」

「もうすぐだよおばちゃん！」

ニコニコと会話するリオンとおばちゃん。

円堂はおばちゃんから渡された林檎を綱海と立向居に渡していた。

日番谷は林檎を渋々受け取り齧っていた。

もう流魂街ではこの様子は日常と化しているようだ。

すると魚を売っていたおじさんが顔を出す。

「おう、リオン君かい！守君の無実を証明するのか？」

「ああ！そのときは現世と映像つないで見せてあげるよ。」

「まったく！あの事件から少しは反省したと思ったたらまだやってるのねあの家族！」

今度はお姉さんが出てきて文句を言う。

「リオン！思いっきりあの家族を懲らしめちゃってよね！（超黒笑）」

「任しとけて！すっげえいいセレモニーを考えてあるからさ……」（超黒笑）」

このお姉さんとリオンはかなり気が合うようだ。

「皆さん、死んでる人なのに全然怖くないですね。」

「ああ、それどころかすっげえ良い人達だぜ！」

立向居と綱海はそう言う。

「お兄ちゃん達！現世の人？」

今度は子供が立向居と綱海に抱きつく。

「ああ！俺は綱海条介っていうんだ！」

「俺は立向居勇氣です。」

「わーい！ツナ兄ちゃん達とは別の人だー！」

「はいはい！また後で遊んであげるから今はちょっと我慢しててね
ー。」

リオンが割り込んでくる。

「そうだなー。午後7時頃ここにいた良い子には新作葛団子を買ってあげましょー！」

「「「わーい！！」」」

子供達は万歳をして喜ぶ。

「いつもすまないねえリオン君。」

お婆さんが出てきて言う。

「いえいえ、どうせこっちのお金は現世じゃ使えないし。それに結構貯金してありますから。」

「本当にありがとうねー。」

「いえいえ、それじゃあ！」

「「「またねーリオンお兄ちゃん！死神のお兄ちゃん達ー！現世のお兄ちゃん達ー！」」」

子供達に手を振りながらリオンは歩いていく。

「ずいぶんと人気があるんですねリオンさんって。」

立向居が尋ねる。

「うん。よく遊びに来るからかな？町の人達はみーんな俺の友達だ！」

そこに松本が来た。

「リオン、いつもの場所とつといたわよ！」

「ありがと蘭菊さん！」

「いいわよ！そ・れ・よ・り！隊長の秘蔵写真…」

「それはもうバッチリ！」

「そう！ありがとう！」

瞬間、日番谷から物凄い霊圧が溢れ出した。

「松本オオオオオオオオ！！リオオオオオオオオオ！！」

「「キヤー！とーしろー（隊長）が怒ったー！」」

「待てゴラアアアアア！！！！」

それからしばらく鬼ごっこが続いたのであった。

「さて！とーしろーが無駄な時間を使ってしまったので……」

「おい、それは俺のせいなのか！？」

「ん？何か言った？（激黒笑）」

「スイマセンデシタアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

日番谷、全力でスライディング土下座。

「さて、綱海と立向居にはある技を覚えてほしいんだ。」

「「ある技？」」

「そう！その技とは……鬼道だああああ！！！！」

リオンと日番谷を除く全員の頭に雷門の鬼道の顔が浮かび上がった。

「違うぜ？鬼道は死神が使っる霊術のことだよ。」

リオンが間違いを訂正する。

「え？死神って剣だけで戦うんじゃないのか？」

綱海が聞く。

「ああ。死神には斬魄刀を使った戦闘法、斬術の他に白打って言う体術、歩法って移動術、瞬歩がこれに入るな。そして鬼道。これらをうまく使って戦うんだ。て、わけで！鬼道の達人と呼ばれる俺と――しろーの幼馴染！雛森桃ちゃんを呼びましたー！」

「よろしくね。でも、短期間で鬼道を覚えるのは容易じゃないからビシバシいくよ！」

「は、はい！」

「じゃ、さっそく桃ちゃん！お手本お願いしまーす！」

リオンの的を立てて言った。

「わかった！」

桃が手を構えた。

「君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ 焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ。鬼道三十一！赤火砲！」

火塊が的を燃やした。

「さっすが桃ちゃん！今のは赤火砲っていう中級鬼道なんだ。詠唱を唱えるのが大変だけどガンバ！」

リオンが水をかけながら綱海と立向居にそう言う。

「守には俺が考えた死ぬ気の炎と霊力を合わせた技を会得してもらうよ。」

「どんな技なんだ？」

「その技の名前は…ぞくせいへんか属性変化。」

円堂が聞いてくるとリオンは技名を言った。

「この技は大空属性の炎を持つものにしか会得できないんだ。そしてこの技はその名のとおり、炎の属性を変化させる。」

「属性を変化…？」

「ああ。普通、炎の属性と言ったら変えられないものだ。だってその人の生命エネルギーであり本質…そして指紋や声紋と同じで一人ひとり炎が異なるからな。でも…隊長格の霊力やその他もろもろを加えることでそれを変えられるとしたら…？」

「か、変えられるのか！？」

「ああ。実際ツナを鍛えてやらせてみたら一瞬だけできた。」

円堂は一瞬という言葉に少しだけ自信をなくした。

幾多もの死闘を乗り越えてきたツナでも一瞬だったのだから。

「お前らに出した課題、綱海と立向居は鬼道をいくつか会得、守は属性変化を会得してもらうよ。期限は3週間後だ。」

「ま、待ってください！何で3週間後なんですか？」

立向居の言葉にリオンは真っ直ぐな瞳をし…

「……全ての闇が晴らされるときだからだ。」

そう答えた。

「それって…!」

「俺はボンゴレやキャバッローネに連絡を入れる。だから皆、先に練習しておいてくれよ。守は死ぬ気の炎をコントロールできるようにしていてくれよ。とーしろー、見ていてくれ。」

「ああ。」

リオンはそう言うとき一時その場を去った。

「ザンザス? ああ。《ちょっとあのファミリー潰して来てよ》?」

「9代目、ありがとございます。これで舞台の準備はほとんど整いました。」

「ああ、頼んだよコロネロ。皆に伝えてくれよ。3週間後につて…」

「ディーノさん、一般人の守護お願いしますね。戦場になりますから。」

リオンは全ての人物に連絡を終えると瞳を瞑った。

「…真実が顔を出したとき偽りは音を立てて崩れる。たとえ砂程度でもね…。さあて、真実をさらけ出す仕上げをしようか…」

ニタリと笑ったりオンの表情はこれまでにないほど真つ黒であった。

現世

「「フィディオ！」」

フィディオの借りているアパートにロニージョ、マークが来ていた。

「2人とも、いらっしやい！」

「久しぶりだなフィディオ。」

挨拶を交わすと互いに椅子に座った。

「フィディオ、大丈夫か？」

「うん。でもどうしていきなり日本に？」

「こんな手紙が届いたんだ。」

ロニージョが銃などの書かれた紋章の判子がついた手紙を広げた。そこには銀色の死炎印も押されていた。

「何だこの炎の印は！？どうして紙が燃えないんだ！？」

フィディオが驚きの声を上げる。

「不思議だろう？それに内容が内容だからビックリした。」

マークはそう言い、英語で書かれた手紙を読み上げた。

「『初めまして。この手紙を読んでいる彼方は円堂守の自殺について知っているかな？

というか、知らない人間なんていなさそうだけどね。だってＴＶとかで大々的に放送されたもん。

そうだ用件だったね。

。月。日。時、雷門中学の体育館に来てみるといい。

そこでこの馬鹿げた人形劇を終わらせてあげるよ。

出演は愚かな騎士達と偽りのお姫様。守護神かつ太陽である少年とその少年を守りし雷の真の騎士達。

そしてお姫様に陥れられし者達とその家族…そしてこの舞台に幕を引くのは俺の仲間のアサリと死神達さ。

ああ、君達の今とっても会いたがっている人…円堂守も連れてきてあげるよ。

彼はこの世に残した心残りのせいで地獄から舞い戻ってきたのだから

ら……。

では、また楽しいパーティーの時に会いしましょう。

b y風の王』」

「風の王だって!？」

風の王の単語を聞くとフィディオは目を見開いた。
そして何よりも円堂が生きているということに喜びを感じていた。

「マモル…か？」

「多分、マモルはやっぱり生きていたんだ!」

雷門中

「雲雀!風紀委員の配置はできた？」

「もちろんだよ。体育館には鼠1匹入れさせやしない。」

雲雀の言葉につこりと笑顔を見せ頷くリオン。

「そのかわり、ちゃんとあの女を追いつ出してよね？」

「もちろんだぜ！あの汚染廃棄物は完膚なきまでに叩きのめすよ」
（超黒笑）」

リオンは真つ黒な笑みを浮かべてそう言った。

あれから3週間後、ついに真実を日の元にさらす日がやって来た。

「じゃ、残りの準備は一兄とーしろーと一緒にお願い。俺は守を
迎えに行くよ。」

そのころ、訓練場では…

「ハア、ハア、やっと…やっと出来た…！」

「やったな円堂。」

リボーンが円堂の頭の上に乗った。

「ああ！やっと出来た…俺の技が…属性変化が！そして卍解も！」

（やっぱり、こいつはとてつもねえバトルセンスを持ってるな。）

リボーンはこの短期間で属性変化に卍解も会得してしまった円堂に
心底感心した。

「守！行くぜ！」

「おう！！」

リオンの言葉によって円堂は走り出した。
すべてに終止符を打つために…

（残念だったな汚染廃棄物女。この馬鹿げた舞台に終止符を打たせてもらう！）

（フィディオ、安心しろ。この馬鹿げた人形劇はもう終わるんだ！）

リオン、円堂はそれぞれそんなことを考え、現世に向かった。

標的11 彗星を護りし2人の少年 終止符を打つ直前（後書き）

次回

「皆、久しぶりだな。」

「アンタ達のせいで全部台無しじゃないッ！！！！！」

「俺だけならまだよかった…。でも、でもお前らは俺の大切な友達に…フィディオにまで酷いことをしたんだ…！！！！！！！」

「誰がどう見たってお前らのやったことは立派な殺人なんだよッ！！！！！」

「人を殺すことすら楽しんでやるとはお前らはもう人間ではない！鬼だ！心が立派な鬼に成り果てたんだぞ！！？」

「恥を知ったらどう？いや、恥どころかその罪悪感でいつそ死んじやえば？（黒笑）」

「輪廻を巡らせてあげますよ…！！！」

「みーんな死んじやえ♪」

「この汚染廃棄物女があああ！！！」

「幕引きの時間だぜお前らああああああ！！！！！」

『終末と罪悪感と死神とアサリと雷と』

標的12 終末と罪悪感と死神とアサリと雷と（前書き）

さあさあシヨ一の始まりだ♪

主演は愚かな騎士達と偽りのお姫様。守護神かつ太陽である少年とその少年を守りし雷の真の騎士達。

そしてお姫様に陥られし者達とその家族…そしてこの舞台に幕を引くのは俺の仲間のアサリと死神達。

さあ、シヨ一の時間だ…！！！！！！

標的12 終末と罪悪感と死神とアサリと雷と

ショーの始まりの2時間前、リオンはグリーン・ウィンドとしての能力をフルに使っていた。

「ふう、これでバッチリ。皆、今日でケリをつけるぜ！」

「ああ。だが何故綱海と立向居に鬼道を覚えさせたのだ？」

「それはね、絶対今日…ショーが終わったあとこの街に大量の虚がやって来るんだ。」

「」「何だつて!?!」「」

一護、ルキア、織姫、チャド、石田、日番谷、円堂。

死神がそれにかなり深く関わっている者はかなり驚いていた。

「しかも狙いは体育館。絶対にその虚はあの汚染廃棄物女が呼び出したものだ。」

「事実をもみ消すというわけか？」

石田の言葉にそういうこと!と言ってウインクするリオン。

「虚は普通の人間には見えないから事実をもみ消すにはもってこいつてわけ。しかも…」

「雷門サッカー部はとくに霊力の強い人間が多いから余計に狙われ

ると?」

「そうだよ。一応クロームの幻術で身を隠した恋兄を時間稼ぎ役として配置させとくけど念には念をつてね…。この2人は一番近くに配置させとくから。」

ルキアの言葉ににこにこ笑って言うリオン。

その日、全校生徒が体育館に集められた。

ただし雷門サッカー部の面々（綱海・立向居・悪女除外）とローニジヨ、マークは端の方に集められた。

ステージに雲雀が上がった。

「やあ君達。僕は隣町の並森を仕切っている雲雀恭也だ。」

雲雀が名を名乗ると全校生徒たちが騒ぎ出す。

もちろんサッカー部の面々も例外ではなかった。

「静かにしないと君達噛み殺すよ?」

その言葉に恐怖を感じすぐに黙る全校生徒。

雲雀の噂は並森の隣町である雷町まで広まっているのだ。

「さて、今回僕がわざわざ出向いたのは他でもない。この学校で起こっている馬鹿馬鹿しい事件についてだ。とくに円堂守を知っている人たちにはお馴染みのね…。そして彼と同じクラスの君達もよく

知っている、その姫川ローサとかいう風紀違反女のイジメ騒動だ。」

その言葉にざわざわと再び生徒たちがざわめき始める。

「いいかい？これから流す映像は真実だからね？合成とか言ったら噛み殺すよ？」

雲雀はトンファーを構えてそう言った。

「おっかないでヤンス…」

栗松の言葉が終わると同時に映像が流された。

『で？用って何？』

『あのねえ、そのお、私、初めて会った時からリオン君のことが好きだったのお。だからあ付き合って欲しいのお』

『無理。ヤダ。』

『んな！？な、何でえ？』

『え？その香水の臭いが嫌い、その化粧の濃さが嫌だ、その腐った精根が嫌だ、その存在自体が嫌だ。』

『何ですってええええ！もう許さないわ！こんつなに可愛い私が付き合ってやるって言ってるのに断るですってええええ！！？』

『どこが？自意識過剰すぎだよ？一回精神科に行け、大丈夫。俺が

とつても腕の良い医者を紹介してやるから。』

『ちよつと！私を侮辱するのもいい加減にしなさい！！』

『え？侮辱されてとーぜん。だってこつやって円堂守も陥れたんだから。』

『な、何であんたがそれを！？』

『さつあねえー』

『私の告白を断ったこと、私を侮辱したことを後悔させてやるわ！キヤアアアアアアアア！！！』

そして生徒たちが屋上に上がってリオンに口々に悪口を言う姿も声もバツチリ記録されていたのだった。

「な、何なのこれ…？」

「う、嘘だろう？」

（何で！？何でこんな映像があるのよ！？）

姫川は慌てはじめた。

「何故、こんな映像があるのか…それは本人から聞いてみれば？」

リオンが袖のほうから現れ雲雀からマイクを渡された。

そしてその後に綱海、立向居、日番谷、ツナ達ファミリーが付いて歩いた。

「ねえ、あんまり群れないでくれる？」

「いいじゃんいいじゃん！後で相手してやるから！」

「そう、それならいいよ。」

「おっしゃー！」

リオンは生徒たちのほうに向き直ると改めて言った。

「はい！じゃ本題に入るよ全校生徒の皆！まずは自分達が信じてきた偽りとは、真逆の現実を知った感想をどうぞ！」

「」「」「」

何も言わない全校生徒。

「あらら？シヨックが強すぎたかな？まあ、無実の人を殺しちゃったんだからね。無理もないや。」

「ちょ、ちょっと待てよ！いつ俺たちが人を殺したんだよ！？」

「そつよそつよー！」

「ハア！？」

「呆れた…ここまで腐ってたなんてね…」

「まあ、それほど馬鹿ということでしょうねクフフフ…」

「というよりここまで洞察力や記憶力がダメになっているのはどうかと思うよ……」

「ハッキリ言つて馬鹿なのな」

「ケツ、アホばっかだなここは……」

「極限にプンスカだぞー!!」

上から順にリオン、ツナ、骸、雲雀、山本、獄寺、了平である。
全員が全員呆れていた。

「何も言えんな……」

日番谷も可愛そうなものを見る目で全校生徒を見やった。

綱海、立向居が続ける。

「ふざけないでください!!!自分が殺した人間のことも忘れちゃうほど彼方たちは馬鹿なんですか!?!」

「お前らが無実の罪で殺したやつはきっと死んでも死にきれないだろうぜ!!」

「それにやった方は覚えていなくてもやられた方はハッキリと覚えてるもんだ!なあ…守!!!!」

リオンは右袖のほうに顔を向けてそう言った。

並森の制服を着た円堂がゆっくりと姿を現した。

「「「な!?!」」」

全校生徒と雷門サッカー部の面々は驚きを隠せずにした。

「皆、久しぶりだな。あれ?俺の顔見ても思い出せないのかよ?自分たちが屋上から笑って突き落としたんだぜ?俺をさ。」

「え、円堂……」

「円堂君……」

「キャプテン!?!」

「キャ、キャプテンの幽霊っすか!?!」

全員が声を上げた。

「って、壁山酷いよ幽霊なんて!ちゃんと足があるだろう!?!」

「って、ことは……」

「本物のキャプテンだ……!」

「円堂、今まで何処行ってやがったんだよ!?!というか何で生きてるんだ!?!」

染岡の言葉に乾いた笑いで返す円堂。

「ちょっと訳があつてさ…後で話すから今は流しといてくれないかな？」

「ああ、守はずっとお前らの傍に居たぜ？四季雷斗、俺の弟としてな！」

「……っ！」「」

全校生徒たちが黙り込んだ。

「だから最終判断は守に任せる。お前らが許せるか許せないかでな。」

「円堂、判断はどうするんだ？」

円堂は日番谷のその言葉に少し黙った。
そして俯いて拳をギュツと握った。

「…今までの俺ならきつと許してたと思う。でも、今回だけは許せない！！皆が憎いんだ！！」

ハッキリと言い放ったその言葉はまさに「憎しみ」が宿っていた。

「俺だけならまだよかった…。でも、でもお前らは俺の大切な友達に…フィディオにまで酷いことをしたんだ…！！！！それは絶対許せない！！！！」

「な、なあ頼むよ円堂！許してくれ！」

「あ、アタシ高校の志望校がかなり難易度の高いところなの！だから

ら前科在りはヤバイの！だから…」

口々と許しを貰おうとする全校生徒たちに円堂は冷ややかな視線を向けた。

それは雷斗の時と同じ視線…

そして円堂が放った言葉は…

「ふざけんじゃねえよ…」

だった。

「俺、あんなこと言っただけど皆が《あの言葉》を心から言ってくれば許すつもりだった。でもさ、皆はそれ以前に自分のことばっかしか考えてないじゃないか！！！！！！」

円堂の怒号が響く。

「……まあ、当然だよな」

リオンがそう言ってステージから飛び降りる。

「だって、お前ら前科付きは志望校にいけなくなるからとか…親にバれたら嫌だからとか自分の保身ばっかだし。それに自分を殺そうとした人間を許すやつが何処に居る？大切な友達を散々酷い目に合わしたやつらに憎しみを持たない人間が何処に居る？なあ、答えるよお前ら。」

リオンの言葉に俯く全校生徒たち。

「答えられないんだね。」

今度はツナが喋り始めた。

「まあ、その汚染廃棄物化粧お化けの嘘に簡単にだまされちゃうくらい低脳なやつだからね。リオンたちが無実だったりしたときのこととか考えてなかったんでしょ？」

「俺からも言わせて貰うが極限に貴様らは四季が出してくれた様々な真実への道しるべを無駄にしてみましたのだぞ！！」

「十代目や芝生頭の言うとおりだ。てめえらは自分たちのことしか考えられない自己中心的なやつらだったんだよ！！」

「俺からも言わせて貰うのな。反省の気持ちがあつたのならすぐにあの言葉が出てくるはずなのな。」

「クフフ…このくらい幼稚園児でもわかることですよ？」

「なのに君たちはそれすら自分のことしか考えないせいで思い浮かばないんだよ。」

「な、何なんだよその言葉って！！」

一人の男子生徒の言葉に再び綱海と立向居、そして日番谷がキれた。

「皆さんはまったくわかっていないんですね…皆さんはまだ円堂さんやフィディオさんに《ごめんなさい》の謝罪のひとつも言っていないんですか！！！！」

「」「！！」「」

「悪いことをしたらすぐに謝る。これは幼稚園生でもできることだぜ？さすがに海の広さに比べても俺もこれは許せないぜ？」

「てめえら全員、幼児教育からやり直して来い！！！！」

3人の声により生徒たちは再び静まり返った。

「お、お前のせいだ！」

「そうよ！私たちを騙してたなんて最っ低！」

次々と生徒たちがそんな言葉を投げかける。

「うつるさいわね！そもそも貴方たちだって私が嘘泣きしたらコロッと騙されてさ！悪いのは騙されたあんたたちのほうよ！」

「何ですって！？」

「制裁してやる！！」

全員が寄ってたかつて姫川に暴力を振るおうとした。その瞬間だった。

ドガアアア！！！！

田堂の武器のロッドが一振りされたことでもものすごい風が巻き起り周りの生徒たちを吹き飛ばした。

「さっすが俺の右腕！やるようになったなあ。しかも初っ端から属

性変化で風の炎を使つたよ……」

「……つぎけんな……！暴力を振るつたのは紛れもなくお前らじゃないか……！自分たちで判断した結果だろう……！？確かに嘘をついた姫川だつて悪い……！でもその言葉を鵜呑みにして俺やフィディオをイジめたのは誰だ……！？」

「……っ……！！」「」

「守を笑つて屋上から突き落としたのは誰だ……！？誰がどう見たつてお前らのやったことは立派な殺人なんだよ……！！！！！」

「人を殺すことすら楽しんでやるとはお前らはもう人間ではない……！鬼だ……！心が立派な鬼に成り果てたんだぞ……！！？」

一護、ルキアの言葉に詰まる生徒たち。

何も言い返す言葉がなかった。

「恥を知つたらどう……？いや、恥どころかその罪悪感でいつそ死んじやえば……？（黒笑）」

ツナの真つ黒言葉に心を痛ませる生徒たち。

「じゃあ、反撃返しといきますか……」（超極悪腹黒笑）」

「……っ……！！！！……？」「」

リオンの言葉に何をされるかどうかを恐ろしくて想像できない生徒たちはガタガタと震え始めた。

「どうやら君たちは喧嘩を売る相手を間違えたようだな。」

石田の言葉に生徒の一人が疑問を言った。

「ど、どういうことなんですか？」

「皆は風の王について知ってるかな？黒髪に藍色の瞳。武器である扇子ひとつで雲雀君と互角の勝負、いや、それ以上の強さを見せる人。そしてこれは並森の人とその関係者しか知らないんだけど…」

織姫が言葉を区切るとチャドが続けた。

「売られた喧嘩は《100億倍返し》で買うんだ。そして風の王に喧嘩を売った人間は《徹底的に社会的地位を地の更にそのまた更に底まで叩き落され》《経済制裁で所持金、貯金、預金全てを根こそぎ奪われ》他には何があった？」

「並森の《死の山で風紀委員長である雲雀、風紀委員全員とサバイバル鬼ごっこ》ができるようにしてくれるんだっただな。あとは…「もう良いです！話が進みません！！！！」「そっか…」」

立向居の言葉に一護は言葉を止める。

他には並森タワーという並森一高いタワーから《紐無しバンジージャンプ》をさせられたりなどがあつたが上げると切りがないのでここで終わらせておこう。

とにかく風の王は容赦のない恐ろしい報復をしてくるとわかった全校生徒は青ざめていた。

そしてそれは雷門サッカー部も同じだった。

「う、怖い…！」

半田の言葉に全員が頷く。

「お前そんなことしてのかよ！？」

「うん♪だって半端じゃまたやってくるじゃんか♪」

円堂の言葉にリオンは悪気が無さそうに頷く。

この会話で全員が風の王の正体がわかったようだ。

風の王…リオンを見て涙目になって顔を青くしていた。

「大丈夫だよ皆！俺、皆の《社会的地位を地の更にそのまた更に底まで叩き落しはする》けど他のはやんないから♪じゃ、骸やつちやつて♪」

「はい。《死なない程度に地獄を見せればいい》んですよね？」

「うん！」

むちゃくちゃ笑顔のリオン。

天使のようだったがこのときの全校生徒には悪魔…いや、大魔王のように見えたということだった。

骸の赤いオッドアイノの瞳に一の数字が浮かび上がる。

「輪廻を巡らせてあげますよ…！！！」

そのまま生徒たちは次々と倒れ苦しみ始めた。

「や、止めてえええ!!」

「く、苦しい…!!溺れるうう!!」

「いや、いや、来ないで、来ないでえええええ!!!!」

「た、助けてくれえええ!!」

雷門サッカー部は啞然としていた。

「な、何をしたの!？」

ロココが骸に聞く。

「僕の技、六道輪廻の一つ。地獄道を使って幻覚を見せているのですよ。」

「六道輪廻?」

「ええ。普通は永遠の悪夢を見せ精神を破壊する技なんですけど…今回は少し力を弱めてやっているんです。本来ならもっとこの愚か者に強力な悪夢を見せたいのですが今回はリオン君の命令でね。」

「あとは少年院にでも送って前科付きつて言うのを世界中の学校や会社に報告すればバツチリ。あいつらには一生をもって償ってもらうことにするよ。さて…」

リオンはステージから降りて姫川に向き直った。

「これでアンタの駒は全て無くなった。このゲーム…俺の勝ちだ。」

「…よくもやってくれたわね…アンタ達のせいで全部台無しじゃないッ！！！！リオン君、今この体育館に外で待機させていた機動隊を突入させたわ！」

「何！？」

「これで彼方達全員お終いよ！！あーっはっはっはっは！！！！」

ふんぞり返って勝利を確信している姫川に哀れんだ視線を向ける雷門サツカー部以外の人間。

「それはどうかな？」

円堂の言葉と同時に体育館に鞭を持った青年と黒服の男たち、そして少々傷だらけの少年と6人の少年、少女、そして黒服のどこか恐怖を感じさせる男たちが現れた。

「フンッ、ドカスばかりだったぞリオン。」

「装備だけはよかったんだけど金の無駄使いだよ。」

「シシシッ、王子たちに勝てるわけ無いじゃん！」

「サンキューヴァリアー。」

「な、な、な、何で独立暗殺部隊のヴァリアーがここにいるのよ！？」

驚く姫川。

そう、彼らはボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアー…。
ボンゴレ最強の部隊だった。

「あれ？言ってなかったっけ？俺、ツナ、獄寺、山本、雲雀、了平先輩、骸、そして守はボンゴレ関係者だぜ？」

「ま、まさか…彼方たちは…マフィア界の番犬ボンゴレファミリーの…十代目とその守護者たち！？」

「ハッ！ようやく気づいたかこの女は！」

「ヴオオオオイ！！名前で気づかなかったのかあああ！！？」

そんな会話をするリオンたち。

そんな中で雷門サッカー部はリオン、円堂たちがマフィアということに驚いていた。

「ボンゴレ関係者の守や俺に手を出したんだ。今回のことはボンゴレに対する完全な敵対行動とみなさせてもらうぜ？」

「あ、ああああ…ゆ、許して……なあんで、言うと思ったかしら？」

生徒たちが黒服の男たちによって外に運び出され居なくなった体育館が赤い月が輝く夜の体育館へと変貌した。

「チッ、来やがったか…！」

「アハハハハハ！！！！今、私たちのファミリーで研究していた虚

たちがやって来るわ！！これで彼方たちこれで本当に全員お終いよ！！！！」

「下がって！」

円堂が全員を下がらせた。そして儀魂丸を飲み込み死神化する。他の死神勢たちも同じように儀魂丸を飲み込んだ。

「な！？体が分裂した！？」

「やっぱりあの時のことは夢じゃなかったのか！」

「炎真！ツナ！とーしろー！皆！いくぜ！！」

「うん！」

炎真と呼ばれた少年は力強く頷くと構えを取った。他の者たちも構える。

「みーんな死んじゃえ♪」

姫川も死神化する。

「残念だけど俺たちは死なないよ。」

リオンも死神化し風蘭を構えた。

「あ、あのときの……！！」

「誰一人な！！！！覚悟しろよこの汚染廃棄物女がああ！！！！」

リオンは振り返って大声で叫んだ。

「この馬鹿げた人形劇の…幕引きの時間だぜお前らあああああああ
あ！！！！」

「「「応！！！！！」」」

全員が返事したと同時に体育館の窓、屋根を突き破って大量の虚が
現れた。

標的12 終末と罪悪感と死神とアサリと雷と（後書き）

次回

「だああああッ！！！！」

「私の斬魄刀の能力はねえ……」

「コロスコロス……」

「誰一人欠けやしない！皆でまたサッカーやるんだ！！！！」

「いけ、守！ケリつけて来い！！」

「仲間と一緒にまた笑ってボール蹴って……シュート決めて……そのために俺は絶対にお前なんかには負けない！！！！」

「卍解ッ！！！！」

「チェックメイトだぜ、汚染廃棄物女！！」

『守護雷光』

予告 未来再戦編（前書き）

この章の後にやる未来編の予告です。

予告 未来再戦編

ある日、平凡な日常を送っていた彼らに起こった出来事。

円堂

「ケホツケホツ！何なんだよいったい〜！」

着いた先は10年後の未来！？

雷門イレブン

「「「え、円堂監督が小っちゃくなっちゃったああああ！?!?!?」
「「」

そこで知る未来で巻き起こりし事件。

円堂

「俺だつて戦うぜ！俺もボンゴレファミリーの仲間なんだ！」

そこで伝えられるリオンに起こった悲劇…

円堂

「そんな、リオンが…？嘘だ、嘘だ、嘘だッ！…！」

リング戦とチョイス…2つが混じったボンゴレリングを奪い合う新たな戦い、レボリューションゲーム。

????

「まあ、君たちもすぐに倒してあげるよ…」

リオン不在のまま風の代表としてゲームに出ることになった円堂…

円堂

「俺だって…やれる!!」

しかし敵の圧倒的な力の前に成す術も無く絶体絶命のピンチに陥ってしまっ!

そんなとき強力な助っ人登場!?

リオン

「俺も久々に骨のある相手と戦ってみたんだ!!」

師弟コンビが敵を追い詰める!!

円堂・リオン

「イナズマ・ウィンド!!」

『みらいさいせんへん未来再戦編近目スタート!』

標的13 守護雷光（前書き）

死神とアサリと雷…

それぞれの仲間に支えられ守護神であり太陽である死神の少年は笑える。

彼の笑顔が再び戻る瞬間は…

標的13 守護雷光

ギヤオオオオオオ…！！！！

リオんたちはバラバラに分かれて虚の攻撃を避けた。

「清き風よ…吹きつけよ！風蘭！」

「響け、守りの鈴…！守鈴！」

リオんと円堂は始解をして霊力を開放する。

「大風！」

リオんは風蘭に風を纏わせその風を刀を振るうことであたりの虚を高く高く空中へ巻き上げた。

「果てろ…！！」

さらに獄寺が2倍ボム…ダイナマイトによって虚を数対、爆破する。

「ハアアアアア…！！！」

そして山本が雨の炎を全ての虚に浴びせる。
すると虚の動きがほとんど停止した状態になった。

「いくぞ！」

そこを全員で攻撃する。

まさに乱戦だった。

雷門イレブンは綱海と立向居が鬼道を使って守っている状態だ。

「だああああッ！！！！」

リオンは風蘭で次々と虚を薙ぎ倒していく。

「守！！」

「え？」

「俺が…俺達が道を作る！お前が決着つけて来い！炎真、ツナ！」

「「ああ！！」」

炎真がまず必殺技を放とうとする。

「超重力BH！」

大量の虚が吸い込まれていく。

「X イクスバーナー BURNER！！」

残りの虚をツナの死ぬ気の炎が焼いていく。

「いけ、守！ケリつけて来い！！」

「わかった…！！」

円堂は勢いをつけて姫川の近くに移動する。

「クロスクロス…」

「おおっと！」

「残念だな。ここは誰も通しはしない…！」

「通りたいのなら俺達を倒していくんだな！」

虚がまた大量にやって来るが円堂の所には行かせまいとリオンとツナ、炎真が立ち塞がる。

「守を…雷の守護神を怒らせたことがお前の失態だ。ここで騒ぎを起こさなきゃ、少しは計画を進められたのにな。チェックメイトだぜ、汚染廃棄物女…！」

「姫川、俺は絶対にお前を許さない！」

「許す？許さなくていいわよ。だって、何ができるの？少し前に死神になったばかりのひよっ子が名家のしかも死神の中でもそれほどの実力を持つてる私に？」

「それも、お前が卑怯な手で他の人を陥れて手に入れた地位だろ！
？もつ全部わかってるんだ。調べたんだから。」

姫川をまっすぐと見る円堂。

「そつ。なら、死になさい！！」

姫川が斬魄刀を振り下ろす。

円堂はそれを守鈴で受け止めた。

ガキーン！

「っ！」

「彼方は結構私の好みの可愛い男の子だったからお人形として傍に
置いておくつもりだったんだけどねえ。」

「俺は死なない。いや、俺の他の人も死なせない！誰一人欠けやし
ない！皆でまたサツカーやるんだ！！！」

「そお…。私、彼方のお家にも虚を2体くらい送っておいたのよね
え。」

「何だつて！？」

円堂の頭の中に自分を信じてくれなかったが大切な両親の顔が浮か
ぶ。

「あら、それってこの虚達のこと？」

蘭菊の声が聞こえる。

振り向くとそこにはボロボロになりながらもトドメを刺されていない虚と斬魄刀を手に持った蘭菊がいた。

「蘭菊さん！！」

「大丈夫よ円堂君、彼方のお家だけじゃない。この雷町やその周りにも死神が大勢、人々を守ろうとしているわ。さあ、彼方はその女をとつと片付けちゃいなさい！」

「くっ…！余計な真似を…！！」

「ありがとう！姫川、いくぞ！」

円堂が反撃しに出る。姫川はそれを避けると斬魄刀を振り紫の真空刃を円堂に向かわせる。

「雷撃^{らいげき}！」

円堂は光の残撃で真空刃を真つ二つに切り裂く。
真空刃は2方へ飛び、触れた所が溶けた。

「んなあ！？」

「ふふふつ、私の斬魄刀の能力はねえ…触れたモノを溶かすことができる能力よ。例えば技でも生き物でもねえ。」

「技でも？じゃあ何で俺の技は溶かされなかったんだ？」

「っ！」

そこに虚を倒しながらリオンが合いの手を入れる。

「あのさ、守。その能力って使い手より霊力が高い奴には効かないってんじゃないの？」

「なるほど！」

「で、でも、彼方の斬魄刀は防御系統ってことはもう調査済みよ！攻撃は大したことないし、卍解でもない限りは私を倒せないわよ！」

「できるよ。」

円堂はあっさりと卍解は既に会得していると言う。

「え？う、嘘でしょ？普通の死神でも会得するにはかなりかかる卍解を彼方はこの1ヶ月で…？」

「普通ならな。俺はリオンが言う限り特別らしいんだ。卍解ッッ！
！！！」

円堂の霊力が膨れ上がっていく。

「な！？」

守鈴は巨大な盾を鞘として収められていた。

刀の方も電気をパリパリと纏っており普通じゃなかった。

「これが俺の卍解した斬魄刀、守護雷光だ!!」

円堂は刀を頭上に掲げる。

「いくぜ!雷撃…残撃っ!!!!!!」

円堂の斬魄刀から稲妻が放たれ、姫川を直撃した。

「キヤアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

姫川が落下した隙にリオンは特殊な機械を着けた姫川の義骸と姫川の霊魂を触れ合わせた。

「これでもう、お前は義骸から出られないぜ。」

リオンがニヤリと笑うと同時に虚も全て退治され、体育館は元の風景を取り戻した。

彼らは知らない。これが未来で起こる新たな戦いの序章となることを。

姫川ローサはあれから復讐者に引き渡され、円堂の無実と生存報告はTVによって報道され、円堂を屋上から突き落とした生徒とイジメを見てみぬ振りしていた教師達は警察に、雷門イレブンや外国から来ていた人間は尸魂界で全てのことを説明してもらっていた。

「つまり円堂は…死んでいるが死神となり俺達を守ってくれていたと言っことか。」

鬼道がそう言々と円堂は頷く。

「それでも、円堂君は円堂君よ！ね、皆！」

秋がそう言った。

「秋…」

「それでヤンス！キャプテンはキャプテンでヤンス！」

「円堂がこっちで死んでようが今、この世界で生きている。頼もしい仲間もできてな。」

「それだけで俺達は嬉しいんだよマモル。」

風丸、フィディオ、雷門イレブンの仲間達、ロニージョ、マークの言葉に涙ぐむ円堂。

「ああーつと、コホン！」

部屋にリオンが入って来る。

「リオン！」

「ふう、14番隊副隊長、円堂守！！」

「は、はい！」

円堂はあわててその場で気を付けをする。

「あの、リ…隊長？」

「お前に任務を言い渡す！本日から、今までお前に関わった雷門イレブン、イナズマジヤパン、イナズマキャラバン、そして…世界中の少年サッカー選手達が生涯を終えるまでの期間。お前は現世で円堂守と言う1人の人間として過ごせ！」

「え！？」

「そして、お前の目の届く所で虚が現れた場合、すぐに倒すこと！以上がお前が本日からやるべき任務だ！」

リオンはそう言うとなにに隊長命令だからね〜、といつもの調子で言った。

「てことは…円堂は俺達と元の仲間として…」

豪炎寺が呆気にとられた顔でつぶやく。

「総隊長の許可も降りている。」

「…」

「返事は!？」

「りよ、了解!! 円堂守は本日から現世での任務を遂行します!」

慌てて言う円堂を見るとリオンはプツと吹き出す。

「アハハハッ! そんな慌てんなって! あ、家はどうする? 両親の所に戻る? それともこっちで用意された家に住む?」

「俺は…母ちゃん達の所に戻るよ。受け入れてくれるかわからないけど…」

「OK! じゃあ、任務開始!」

「はい! リオン隊長、最高だぜ!!」

円堂が抱きつく。

「アハハハッ! じゃあ、今度何か奢れよ?」

「もちろん!」

「じゃあ、行つて来い!」

リオンは穿界門を開いた。

「皆、現世^{あっち}でまた、サッカーしようぜ!!」

「」「」
「おう!!」「」「」

標的13 守護雷光（後書き）

次回

「ここどこさっ!？」

「円堂、現実から目を背けちゃダメだ!」

「アンタ誰?」

「円堂が、私を知らない…?」

「異世界の幽体離脱ってすげえなおい。」

「よし、奢ってくれ!」

「この世界の円堂の友人、超黒いな!？」

『イナズマジャパンのトラブルメーカー、異世界から来る!』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1684u/>

イナズマフィアブリーチ～堕とされた太陽と死神とマフィア達～

2011年10月15日19時01分発行